

北大構内の遺跡

XXIII

平成 27 年度調査報告

第 1 部

K 39 遺跡事務局非常用自家発電設備地点

K 39 遺跡事務局本館屋外排水設備地点

K 39 遺跡旧留学生センター改修地点，他

第 2 部

平成 27 年度年次事業報告

北海道大学
埋蔵文化財調査センター

平成 29 年 3 月

北大構内の遺跡

XXIII

例 言

1 本書の第1部は、北海道大学構内において平成27(2015)年度に実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたもの、第2部は、平成27(2015)年度に実施した事業の年報である。

2 調査は北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会、調査専門部会の指導のもと、北海道大学埋蔵文化財調査センターが中心となって実施した。平成27年度の埋蔵文化財調査センター運営委員会・調査専門部会・埋蔵文化財調査センター員は以下の通りである(所属・職名は平成27年度のもの)。

【埋蔵文化財調査センター運営委員会】

小杉 康 委員長 (大学院文学研究科 教授, 埋蔵文化財調査センター長)

三上 隆 委員 (副学長)

高瀬克範 委員 (大学院文学研究科 准教授)

増田隆一 委員 (大学院理学研究科 教授)

石川達也 委員 (大学院工学研究科 教授)

佐野雄三 委員 (大学院農学研究科 教授)

山本正伸 委員 (大学院地球環境科学研究科 准教授)

高橋英樹 委員 (総合博物館 教授)

【埋蔵文化財調査センター運営委員会調査専門部会】

小杉 康 部会長 (大学院文学研究科 教授)

高瀬克範 部会員 (大学院文学研究科 准教授)

増田隆一 部会員 (大学院理学研究科 教授)

石川達也 部会員 (大学院工学研究科 教授)

佐野雄三 部会員 (大学院農学研究科 教授)

山本正伸 部会員 (大学院地球環境科学研究科 准教授)

高橋英樹 部会員 (総合博物館 教授)

【埋蔵文化財調査センター員】

高倉 純

守屋豊人

坂口 隆

本山志郎

3 本書の編集は小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎がおこなった。執筆分担は文末に明示した。

4 整理作業に関しては、以下の人々が従事した。

伊藤麻由, 大沼まり, 奥山晋司, 坂口 隆, 高倉 純, 百々千鶴, 名取千春, 本山志郎, 守屋豊人, 山田由美子, 吉井圭子

5 関連科学については、下記の諸氏・諸機関に分析を依頼し、第II章に玉稿をいただいた。

第II章1-7 炭化種子同定：高瀬克範, 第II章2-6 放射性炭素年代測定：伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadize・小林克也(株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ)

-
- 6 関連科学分析に対する埋蔵文化財調査センター員のコメントを各節に付した。
- 7 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。
- 神田和彦，越田賢一郎，佐藤 剛，仙庭伸久，田口 尚，中田裕香，村田晃一，札幌市埋蔵文化財センター，北海道教育委員会，北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座，シン技術コンサル
- 8 出土遺物・調査記録は，北海道大学埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

凡 例

- 1 方位は真北に統一している。
- 2 緯度・経度は、世界測地系に統一している。
- 3 挿図の縮尺は、各々にスケールをいれて示した。基本的な縮尺率は以下の通りである。
遺構 竪穴住居址：1/40・1/80
 炉址：1/20
 土坑：1/40
 小ピット：1/20

遺物 土器：1/2
 剥片石器：2/3
 礫石器：1/3
- 4 写真の縮尺は、遺構や層序については任意であるが、遺物は挿図と基本的には同じ比率である。ただし、異なる場合については明記した。
- 5 遺構図面で使用したシンボル等の凡例は図1に示した。また、遺物記号の凡例は図2に示した。
- 6 土器・石器の属性凡例図は図3、4に示した。
- 7 遺構の平面図、断面図、本文中で使用した遺構の略称は以下の通りである。
HP：竪穴住居址，HE：炉址，PIT：土坑，SPT：小ピット
- 8 土層観察の際の色相、土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）を用いた。

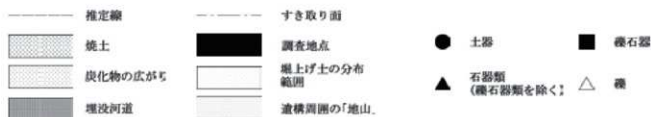


図1 図面凡例図

図2 遺物記号凡例図

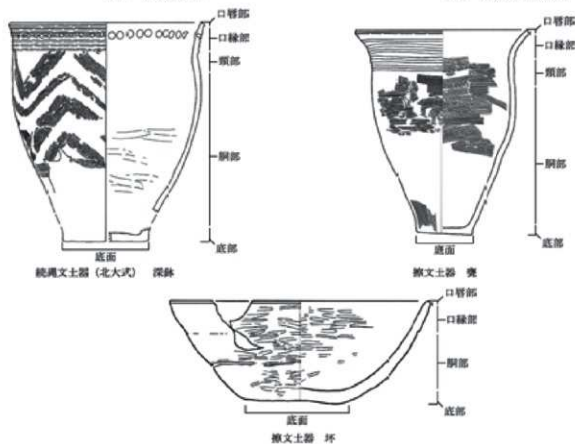


図3 各器種の土器部位呼称図

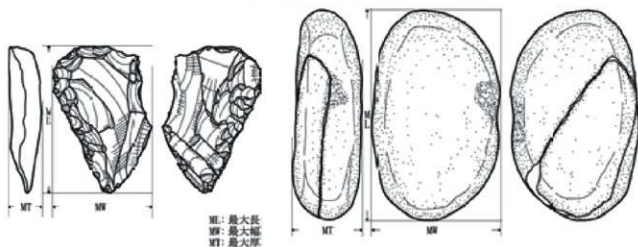


図4 石器計測位置図

《目次》

例言	1
凡例	3
目次	5

《本文目次》

第1部 調査報告	7
第1章 北大構内の遺跡と調査の概要	8
I-1. 地理的環境と遺跡の立地	8
I-2. 2015年度の調査概要	11
第2章 発掘調査の成果	14
II-1. K39遺跡事務局非常用自家発電設備地点の発掘調査	14
1. 調査にいたる経緯	14
2. 調査の手順	14
3. 立地と周辺の遺跡	17
4. 層序	18
5. 遺構	19
6. 遺構外出土の遺物	28
7. 自然科学分析の結果	29
8. まとめ	32
II-2. K39遺跡事務局本館屋外排水設備地点の発掘調査	37
1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	37
2. 調査の経緯と方法	37
3. 層序と古地形	39
4. 遺構	40
5. 遺物	42
6. 自然科学分析の結果	44
7. まとめ	45
II-3. K39遺跡旧留学生センター改修地点の調査	47
1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査	47
2. 調査の概要	47
3. 層序	49
4. 遺構	49
5. 遺物	50
6. まとめ	51
第3章 試掘・立会調査の成果	53
III-1. 試掘・立会調査で確認された層序	53
III-2. 2015年度試掘・立会調査の結果	55

第2部 平成27年度年次事業報告	61
2-1. 調査活動	62
2-2. 教育普及活動	62
2-3. 統計・資料	65
参考・引用文献	68

《図目次》

図1 図面凡例図	4
図2 遺物記号凡例図	4
図3 各器種の土器部位呼称図	4
図4 石器計測位置図	4
図5 北大構内の遺跡と2015年度調査実施地点	9
図6 グリッド呼称図	12
図7 北大構内グリッド配置図(1マス100m)	12
図8 事務局非常用自家発電設備地点(○)の位置	14
図9 事務局非常用自家発電設備地点(★)と周辺の地点	15
図10 事務局非常用自家発電設備地点周辺の住居址と主な出土遺物	16
図11 事務局非常用自家発電設備地点全体図及びグリッド配置図	17
図12 事務局非常用自家発電設備地点の基本層序と土層対比	17
図13 事務局非常用自家発電設備地点北壁土層堆積状況	18
図14 事務局非常用自家発電設備地点遺物分布図	19
図15 事務局非常用自家発電設備地点検出の竅穴住居址HP01	20
図16 事務局非常用自家発電設備地点HP01の遺物分布	20
図17 事務局非常用自家発電設備地点土器接合関係図	22
図18 事務局非常用自家発電設備地点HP01-2~4層出土土器実測図及び拓影図	23
図19 事務局非常用自家発電設備地点HP01-5層出土土器実測図及び拓影図・土製品実測図	23
図20 事務局非常用自家発電設備地点検出の卍・小ピット	25
図21 事務局非常用自家発電設備地点包含層出土土器実測図及び拓影図	26
図22 事務局非常用自家発電設備地点包含層出土石器実測図	28
図23 事務局本館屋外排水設備地点と周辺の住居址	38
図24 事務局本館屋外排水設備地点出土陶磁器の実測図及び写真	39
図25 事務局本館屋外排水設備地点遺構と遺物の検出状況	39
図26 事務局本館屋外排水設備地点堆積状況	40

図27	事務局本館屋外排水設備地点検出のHP 01 土層断面図	41
図28	事務局本館屋外排水設備地点出土の土器実測図及び拓影図	41
図29	事務局本館屋外排水設備地点検出のPIT 01	42
図30	事務局本館屋外排水設備地点出土の土器実測図	42
図31	事務局本館屋外排水設備地点層年較正結果	44
図32	旧留学生センター改修地点の発掘調査位置	47
図33	旧留学生センター改修地点発掘調査範囲の平面図及びセクション図	48
図34	旧留学生センター改修地点PIT 01の平面図及びセクション図	50
図35	旧留学生センター改修地点出土遺物の実測図及び拓影図	51
図36	構内試掘・立会調査セクション図	53
図37	構内試掘・立会調査位置図(1)	56
図38	構内試掘・立会調査位置図(2)	57
図39	構内試掘・立会調査位置図(3)	58
図40	北大札幌キャンパス内のゾーン区分	63

〈表目次〉

表1	2015年度実施調査一覧	11
表2	事務局非常用自家発電設備地点北壁土層観察表	18
表3	事務局非常用自家発電設備地点HP 01土層観察表	21
表4	事務局非常用自家発電設備地点HP 01出土土器・土製品観察表	24
表5	事務局非常用自家発電設備地点炉址・小ピット土層観察表	25
表6	事務局非常用自家発電設備地点包含層出土土器観察表	27
表7	事務局非常用自家発電設備地点包含層出土土器観察表	28
表8	事務局非常用自家発電設備地点HP 01出土の種子分類群一覧	30
表9	事務局本館屋外排水設備地点層序観察表	40
表10	事務局本館屋外排水設備地点検出のHP 01層序観察表	41
表11	事務局本館屋外排水設備地点出土土器観察表	42
表12	事務局本館屋外排水設備地点検出のPIT 01土層観察表	42
表13	事務局本館屋外排水設備地点出土土器観察表	42
表14	事務局本館屋外排水設備地点の放射性炭素年代測定試料及び処理	44
表15	事務局本館屋外排水設備地点の放射性炭素年代測定及び層年較正の結果	44
表16	旧留学生センター改修地点基本層序観察表	49
表17	旧留学生センター改修地点PIT 01土層観察表	50

表18	旧留学生センター改修地点PIT 01出土土層観察表	51
表19	旧留学生センター改修地点遺構外出土土器観察表	51
表20	旧留学生センター改修地点遺構外出土土器観察表	51
表21	北大構内試掘調査層序観察表	54
表22	常設展示資料一覧表	62
表23	月別開館日数及び入館者数	65
表24	受領刊行物一覧表(1)	66
表25	受領刊行物一覧表(2)	67

〈写真目次〉

写真1	事務局非常用自家発電設備地点HP 01出土の植物遺体	30
写真2	事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(1)	33
写真3	事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(2)	34
写真4	事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(3)	35
写真5	事務局非常用自家発電設備地点の調査(1)	35
写真6	事務局非常用自家発電設備地点の調査(2)	36
写真7	事務局本館屋外排水設備地点出土の土器	43
写真8	事務局本館屋外排水設備地点出土の土器	44
写真9	事務局本館屋外排水設備地点の調査	46
写真10	旧留学生センター改修地点の出土遺物	52
写真11	旧留学生センター改修地点の調査	52
写真12	2015年度調査の状況	60
写真13	展示室の様子	62
写真14	第13回トレイルウォークの様子	64
写真15	第8回調査成果報告会の様子	64

第 1 部 調査報告

第 I 章 北大構内の遺跡と調査の概要

1-1 地理的環境と遺跡の立地

北海道大学の札幌キャンパスは、札幌市域の北部にある。札幌市域の地形は、第一に新第三紀から第四紀初期に形成された北西部から南西部にかけての山地、第二に支笏火砕流堆積物からなる東部の丘陵や台地、第三に後期更新世から完新世中頃にかけて、豊平川や発寒川によって形成された扇状地や河岸段丘、第四に北部の沖積低地に大きく分けられる。

北大札幌キャンパスは、豊平川によって形成された豊平川扇状地から沖積低地への移行区域にある。平岸面と札幌面に分かれる豊平川扇状地において、北大札幌キャンパスの南側はおおよそ 3500 年前頃に形成されたと思われる（大丸 1989）札幌面の末端に位置する。キャンパス南側の人文・社会科学総合教育研究棟地点（小杉他編 2004・2005）では、標高 10.5 m 前後から札幌面を形成したと考えられる扇状地の堆積物が確認されている。一方キャンパスの北側では、低温科学研究所周辺で掘削されたボーリング・コアのデータをもとに、札幌面の堆積物は確認されていない（嵯峨山他 2007）。縄文文化あるいはそれ以前に相当する段階に関しては、地形面の発達や時期ごとの堆積環境において、キャンパスの南側と北側には違いがあった可能性に注意しなければならない。

扇状地末端には湧水地点がかつては多くみられた。北大札幌キャンパスの南側に位置する植物園や清華亭、知事公館周辺にも湧水地点があったことがわかっている。こうした湧水地点からの流水を集めて形成された河川が、構内を南から北へむけていくつか蛇行しながら流れていた。サクシュコトニ川、サクシュコトニ川の支流、セロンベツ川として区別し、知られている河川がそうしたものである。

それらの河川位置に関しては、古地図、等高線図、航空写真から理解できるほか、調査の過程で確認した埋没河道によっても検証できる。キャンパス内を流れていた河川は、流路の位置をときに大きく変えながら、縄文文化や擦文文化に相当する時期には氾濫を繰り返していたようである。氾濫によって供給された堆積物やその侵

食によって、河川周辺の微地形面（河谷、微高地、後背湿地など）が形成されていったと考えられる。当該期の遺跡は、北大構内においては河川沿いの微高地から検出される場合が最も多いが、河谷内から確認される場合もある。

北大札幌キャンパスの全域は、植物園が「C 44 遺跡」、第二農場の一部が「K 435 遺跡」、それ以外の区域が「K 39 遺跡」として、埋蔵文化財包蔵地に登録されている。しかし、それらは実質的には「遺跡群」と呼べる。遺跡の集合と考えられる。本報告では、2002 年に刊行された報告（小杉編 2002）に準じ、便宜的に発掘調査がなされて区域ごとに「○遺跡○地点」と呼称して記載を進めていく。それぞれの地点の名称は、調査の原因となった工事に関連付けて設定することとした。

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、1994 年に実施した大学構内のやや南側に位置するゲスト・ハウス地点での発掘調査において、北大構内での標準層序の統一化を検討した。その結果、層序を大きく 9 つに区分することが試案として提示された（吉崎編 1995）。また、毎回実施される試掘調査による堆積層のデータから、北大構内の堆積層位が大きく 4 つにまとまること（サクシュコトニ川の上流部左岸：大野池周辺、サクシュコトニ川上流部右岸：学術交流会館周辺、サクシュコトニ川の中流部右岸：工学部北部～低温科学研究所、サクシュコトニ川の下流部左岸もしくはセロンベツ川下流部の両岸：第一農場北部）が示されている（小杉編 2002）。

現在も、標準層序を念頭に置きながら、地域的な変異を考慮した堆積層位の体系的な理解を北大構内で進めていることから、発掘調査や試掘調査で確認された層序の対比をおこなう場合のために、以下に標準層序の概要を示す。

0 層：客土、盛土

I 層：黒色土（旧表土）

II 層：灰色シルト

III 層：白色粘土と有機物の多い黒色土の互層

IV 層：灰褐色シルト層・粘土層

V 層：黒色と灰色の粘土の互層

VI 層：灰褐色シルト層と粘土層

VII 層：青色粘土層

VIII 層：砂利、砂、シルトの互層

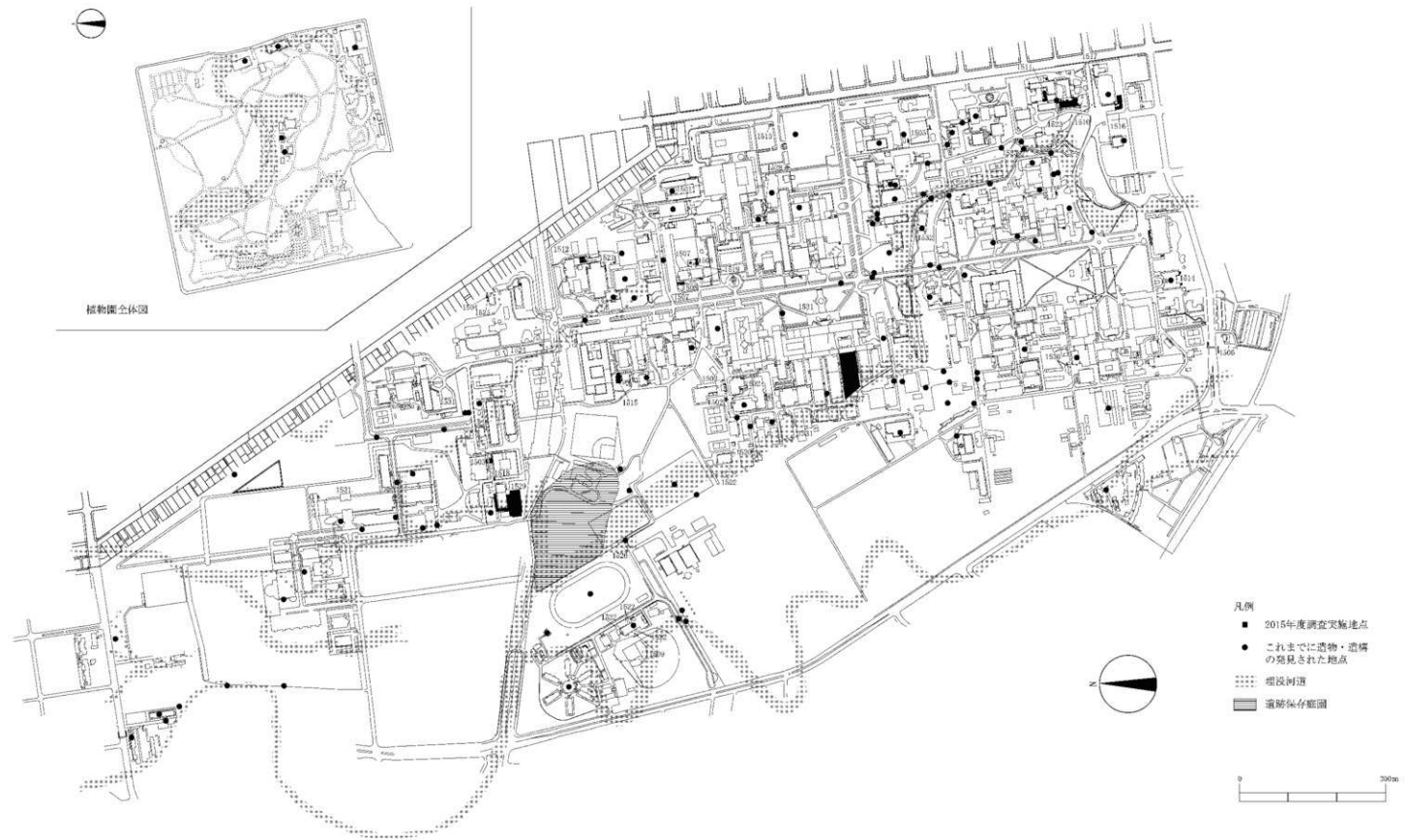


図5 北大構内の道跡と2015年度調査実施地点

表1 2015年度実施調査一覧

調査番号	調査日	工事名称	調査の種類	工事面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	文化	遺構・遺物
1501	'14 10/29~'15 12/9	総合研究棟 (医学系) 改修工事	立会	302	302		遺構・遺物なし
1502	'15 4/15~'11/14	工学部屋外ガス管修理工事	立会	78	78		遺構・遺物なし
1503	'15 4/20・21	獣医学部渡り廊下設置工事	試掘調査・慎重工事	101	101		遺構・遺物なし
1504	'15 5/7	保育園がプラ土壌入替工事	立会	7	7		遺構・遺物なし
1505	'15 5/12	情報基盤センター北館自家発電設備工事	立会	30	30		遺構・遺物なし
1506	'15 5/12	局長宿舍屋外ガス設備工事	立会	13	13		遺構・遺物なし
1507	'15 5/13~18	アイソトープ総合センター外灯設備工事	立会	17	17		遺構・遺物なし
1508	'15 5/20~22	アイソトープ総合センター環境整備工事	立会	155	155		遺構・遺物なし
1509	'15 5/21	野球場屋外給水管修理工事	立会	18.6	18.6		遺構・遺物なし
1510	'15 6/2~9 8/24~9/4	事務局本館屋外排水設備その他工事	発掘調査・試掘調査	117	117	歴史文化	竪穴住居址1基、土坑1基、 部文土器、石函、礎
1511	'15 6/11~16 9/1~10/13	事務局非常用自家発電設備設置工事	発掘調査・試掘調査	196	196	縄縄文~歴史文化	竪穴住居址1基、竪穴1基、 小ビット5基、部文土器、 土製品、石函
1512	'15 6/15~23 11/11~12/18	札幌キャンパス遊園施設自家発電設備工事	試掘調査・立会	240	240		遺構・遺物なし
1513	'15 6/15	病院第一外来駐車場土壌入替工事	立会	1.1	1.1		遺構・遺物なし
1514	'15 6/29~7/1 9/24~11/5	旧留学生センター改修工事	発掘調査・試掘調査 立会	69	69	縄縄文文化	土坑1基、縄縄文土器、礎、 縄縄文
1515	'15 6/29~7/13 10/2~9	札幌キャンパス遊園施設水槽設置その他工事	試掘調査・立会	260	260		遺構・遺物なし
1516	'15 7/21~28	札幌キャンパス災害用備蓄倉庫新築工事	試掘調査	336	336		遺構・遺物なし
1517	'15 8/17~24	管理棟新築工事	試掘調査	649.5	32	歴史文化	竪穴住居址1基、土坑2基、 部文土器、石函
1518	'15 8/19~24	獣医学部入替ゲート設置工事	立会	82	82		遺構・遺物なし
1519	'15 8/20~10/29	アイソトープ総合センター新宮機械設備工事	立会	89	89		遺構・遺物なし
1520	'15 8/24・25	工学部地熱設備工事	立会	15	15		遺構・遺物なし
1521	'15 8/25~29, 10/19	札幌キャンパス遊園施設新築工事	立会	992	933		遺構・遺物なし
1522	'15 9/2~'16 3/31	学生支援施設(サークル会館)耐震改修その他工事	慎重工事	8	8		遺構・遺物なし
1523	'15 9/18, 11/11	事務局本館木修理工事	試掘調査・立会	28	28		遺構・遺物なし
1524	'15 9/24・25	モデルバーンフェンス改修工事	立会	3.1	3.1		遺構・遺物なし
1525	'15 10/8	保育園がプラ埋用オイル配管工事	立会	2	2		遺構・遺物なし
1526	'15 10/13・14	陸上競技場フェンス改修工事	立会	23.6	23.6		遺構・遺物なし
1527	'15 10/13~11/6	総合研究棟 I (工学系) 新築工事	試掘調査	2,963	230		遺構・遺物なし
1528	'15 10/29	大学病院管理棟屋外排水設備工事	立会	6	6		遺構・遺物なし
1529	'15 11/11~27	獣医学研究科大動物実験研究施設新築工事	試掘調査	1,801	129.6	縄縄文~歴史文化	柱穴址1基、縄縄文土器(器 土中)、部文土器
1530	'15 11/16・17	農学部北側園外緑工事	立会	5	5		遺構・遺物なし
1531	'15 11/24	札幌キャンパス太陽光外灯設置工事	立会・慎重工事	6	6		遺構・遺物なし
1532	'15 12/1~'16 1/29	弓道場埋用オイル配管改修工事	慎重工事	2.6	2.6		遺構・遺物なし

I-2 2015年度の調査概要

2015年度、北海道大学構内では本発掘調査3件、試掘調査11件、立会調査23件、慎重工事4件を実施した(表1, 図5)。調査件数に関しては工事名称から算出しているが、一工事案件に試掘調査と発掘調査の両方がある場合や、試掘調査と立会調査の両者を実施した場合には、発掘調査、試掘調査、立会調査の件数に振り分けて算定している。

本発掘調査は、事務局本館屋外排水設備などの工事に伴う箇所(K39遺跡事務局非常用自家発電設備地点:調査番号1510)、事務局非常用自家発電設備に伴う建物工事

に伴う箇所(K39遺跡事務局非常用自家発電設備地点:調査番号1511)、旧留学生センターの建物改修工事に伴う箇所(旧留学生センター改修地点:調査番号1514)でおこなった。

また、建物の建設工事に伴って、数多くの試掘調査を事前に実施した。上記3地点の工事予定地、管理棟新宮の工事予定地(調査番号1517)といった構内南部(サクシュコトニ川上流部の兩岸)や、総合研究棟I(工学系)新宮、札幌キャンパス遊園施設水槽設置の工事予定地(調査番号1527, 1515)といった構内中央部(サクシュコトニ川中流部の右岸)や、獣医学研究科大動物実験研究施設、獣医学部渡り廊下設置の工事予定地(調査番号1529, 1503)といった構内北側(サクシュコトニ川下流部)にみられる支流周辺が主なものである。

試掘調査を実施することによって、5箇所の工事予定

地で遺構・遺物が確認された。それらの内、事務局本館屋外排水設備などの工事予定地(K39遺跡事務局本館屋外排水設備地点)、事務局非常用自家発電設備に伴う工事予定地(K39遺跡事務局非常用自家発電設備地点)、旧留学生センター建物改修の工事予定地(旧留学生センター改修地点)の3つは、上述のように、2015年度に発掘調査を実施した。それら以外の管理棟新築工事予定地、獣

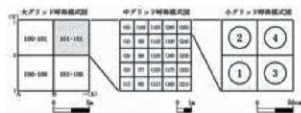


図6 グリッド呼称図

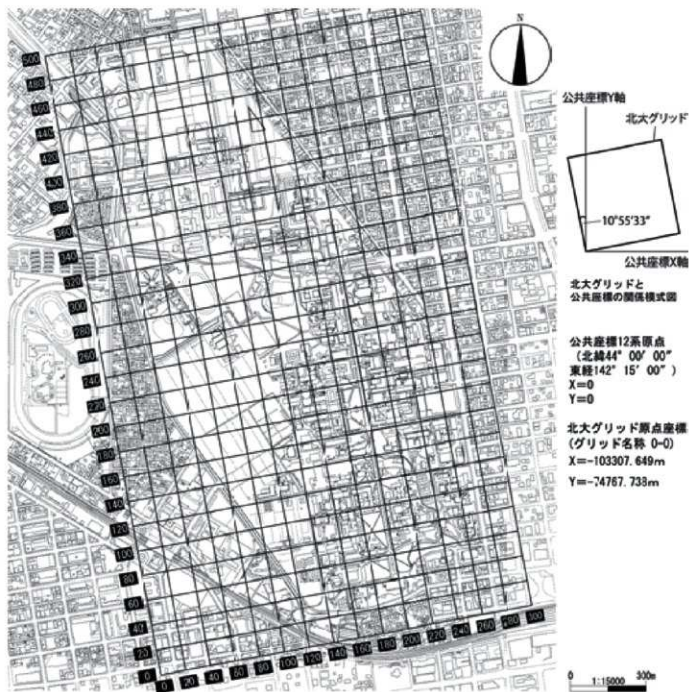


図7 大学構内グリッド配置図(1マス100m)

医学研究科大動物実験研究施設の工事予定地は、協議を重ね、2016年度に発掘調査をおこなうこととなった。

第1部調査報告では、第II章として2015年度に実施した本発掘調査3件(K39遺跡事務局本館屋外排水設備地点、K39遺跡事務局非常用自家発電設備地点、旧留学生センター改修地点)の成果を報告する。加えて、第III章では表1で示した調査番号に基づき、試掘調査、立会調査の概要をまとめ、報告する。

なお、本発掘調査が実施された箇所に関しては、北海道大学札幌キャンパス内全体を対象に設定された5×5mを基本グリッドとする方眼を用いて各種の記録をおこなっている(図6, 7参照)。この仮想原点の設定は、

公共座標に対応させておこなった。北緯44°00'00"、東経142°15'00"の地点を基準点とし、X軸方向に-103307.649m、Y軸方向に-74767.738mの地点を方眼の仮想原点としている。Y軸の方位は、N10°55'33"Wである。Y軸とX軸との関係は数学系座標と同じであり、それぞれのグリッドには算用数字で記号を付して表記する。上記のことから、植物園の範囲は仮想原点よりも南に位置する。植物園内での2015年度の調査を実施しなかったため、図7では示していないが、植物園の範囲はY軸方向の数値がマイナス表記となる。

(守屋)

第II章 発掘調査の成果

II-1 K39 遺跡事務局非常用自家発電設備地点の発掘調査

1. 調査にいたる経緯

平成27(2015)年、北海道大学の事務局非常用自家発電設備設置工事の計画が策定された。これをうけ、北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、工事予定地内での埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を平成27年6月11日～6月16日まで実施した。試掘調査は工事予定地内に約3m×3m、平均深度1.8mの試掘坑を1箇所、約1.5m×1m、平均深度1.5mの試掘坑を4箇所設置して実施した(図11)。その結果、試掘坑TP04から、縄文文化の遺構・遺物が検出され、工事予定地内に縄文文化の遺構・遺物が遺存していることが明らかとなった。試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が行われたが、工事計画を変更することが困難であったため、本発掘調査を実施することが決定された。発掘調査は196m²を対象とし、平成27年9月1日～平成27年10月13日まで実施した。

本地点は、北海道大学札幌キャンパス南側に位置し、その座標位置は、北緯43度4分18秒、東経141度20分48秒である(図8～10)。

(坂口)

2. 調査の手順

発掘調査は、客土を重機で除去し、試掘調査で遺物の包蔵が確認されている基本層序2a層から人力で調査を進めていった。その後、基本層序2b層まで掘削するとともに遺構確認のための精査を行った。発掘調査に関する記録は、調査区に設定した方眼を用いておこなった(図7・11)。方眼は5×5mを基本グリッド(北大グリッド)としたものであり、北海道大学構内全体を対象として設定したものである。グリッドの設定は、公共座標に対応させておこなっている。

遺構の測量、土層断面図の作成などは、グリッドをもとにトータルステーションを使用して座標位置の記録をおこなった。遺物もプライマリーな状態で出土したもの



図8 事務局非常用自家発電設備地点(○)の位置

については、トータルステーションで取りあげている。遺構、遺物の出土状態、及び各種の土層断面に関しては、白黒・リバーサルフィルムで写真撮影を行うとともに、適宜デジタルカメラを用いて記録をおこなった。

竪穴住居址(HP01)の調査は、調査区西壁に沿ってサブトレンチを設定し、覆土の堆積状況を確認後、掘り下げを行った。遺物はトータルステーションで座標位置の記録をするともに層位的に取り上げた。水洗・浮遊選別法による微細遺物の回収を通してHP01における居住活動の内容を検討するため、床面、覆土、カマド煙道部から土壌サンプルを採取した。また、床面、覆土からHP01の時期を検討するための放射性炭素年代測定用

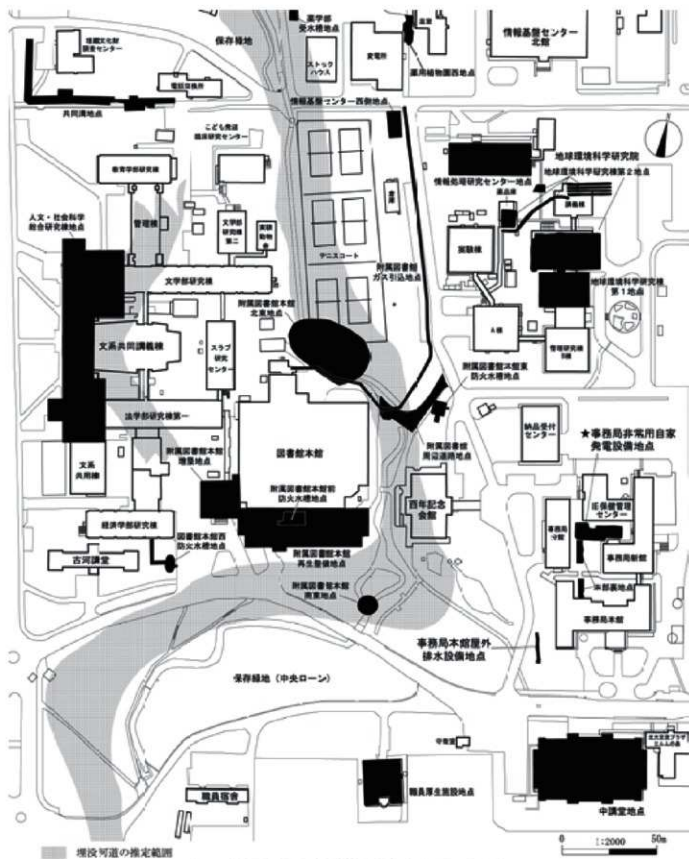


図9 事務局非常用自家発電設備地点(★)と周囲の地点

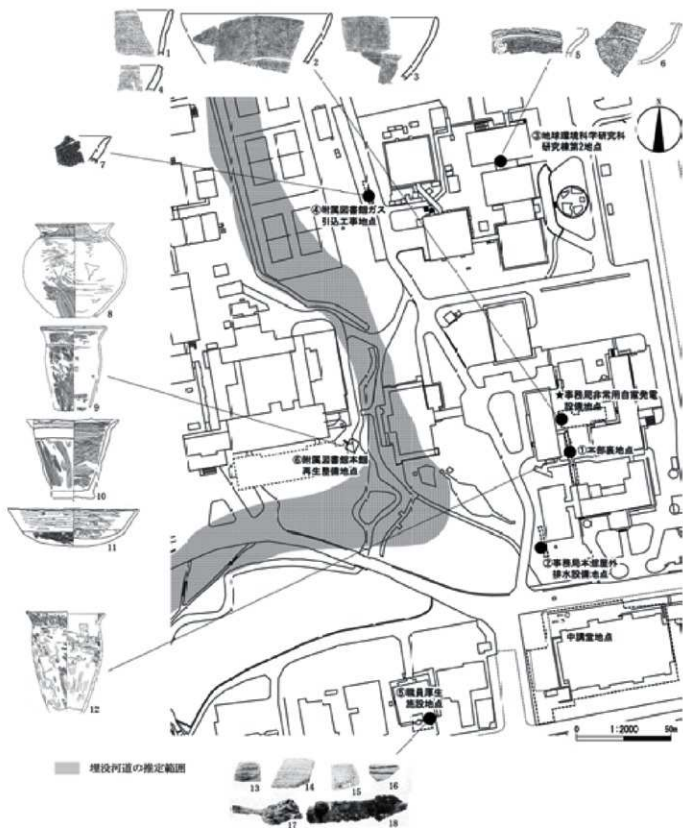
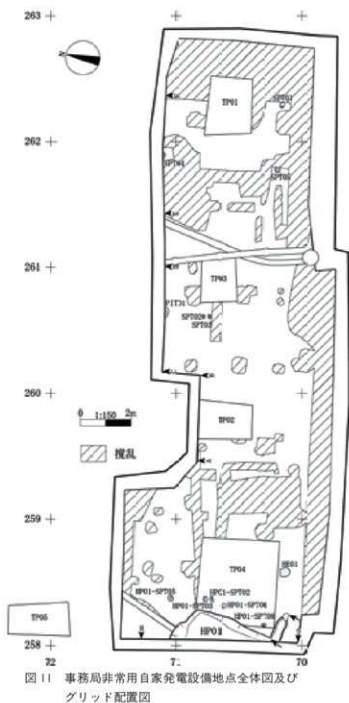


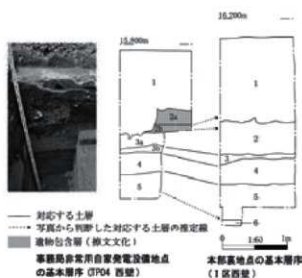
図10 事務局非常用自家発電設備地点(★)周辺の住居址(●)と主な出土遺物(縮尺不同)
吉崎編 1989, 小杉編 2002, 小杉他編 2012, 小杉他編 2013 から作成



の試料を採取している。

発掘調査終了後、整理作業に着手した。平成 27(2015)年度は、遺物の水洗・注記・分類・計測・拓本・実測、及び図面整理作業などを実施した。平成 28(2016)年度は、遺物の写真撮影、トレース、報告書の執筆と編集作業を実施した。

上述の土壌サンプルは乾燥後、フローテーション装置と 2.0 mm、0.71 mm、0.425 mm メッシュ篩を併用して



微細遺物を回収した。微細遺物は、肉眼、及び顕微鏡を用いて動物遺体、植物遺体、土器、石器、その他に選別した。これらの作業は、北海道大学埋蔵文化財調査センターで行った。その後、植物遺体については、専門研究者に鑑定を依頼した。

(坂口)

3. 立地と周辺の遺跡

本地点はサクシュコトニ川右岸の平坦面に位置し、その西側には中央ローンから続く河谷が形成されている(図 9・10)。本地点における現地表面の標高は約 15.7 m で、現河谷との高低差は 3 m~3.5 m ある。本地点周辺では遺跡が密集し、これまで度々発掘調査が実施されてきた。附属図書館本館再生整備地点では、縄文文化後期や統縄文文化前半期の遺物、中講堂地点では、統縄文文化末期の小竪穴 2 基、附属図書館本館北東地点でアイヌ文化期の定置漁具とみられる杭列が発見されている(吉崎・岡田編 1987, 小杉編 2003, 小杉他編 2012)。

特に、①本部裏地点、②事務局本館屋外排水設備地点、③地球環境科学研究科研究棟第 2 地点、④附属図書館ガス引込工事地点、⑤職員厚生施設地点、⑥附属図書館本館再生整備地点で縄文文化前期の竪穴住居址が各 1 基検出され、河谷沿いに該期の集落が展開していたことが判明しつつある(吉崎編 1989, 小杉編 2002, 小杉他編 2012, 小杉他編 2013)。

(坂口)

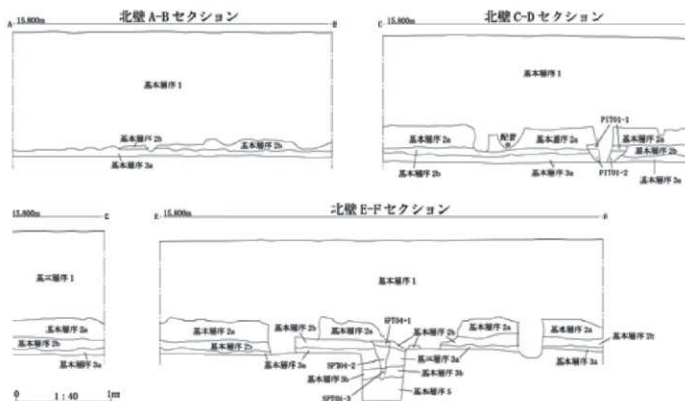


図13 事務局非常用自家発電設備地点北壁土層堆積状況

表2 事務局非常用自家発電設備地点北壁土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
基本層序	I						客土
	2a	10 YR 1.7/1	黒色	シルト	弱	強	遺物包含層、焼土粒子・炭化物2mm大を極微量含む。
	2b	2.5 Y 3/1	黒褐色	シルト	弱	強	遺物包含層、調査区西側で遺物数点出土。
	3a	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	シルト	弱	強	
	3b	2.5 Y 6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	
PIT 01	PIT 01-1	10 YR 1.7/1	黒色	シルト	弱	強	上部の厚さ約5cmは灰黄色粘土。
	PIT 01-2	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	弱	強	
SPT 04	SPT 04-1	10 YR 4/1	褐灰色	シルト	弱	強	
	SPT 04-2	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	弱	強	
	SPT 04-3	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	粘土質シルト	やや強	弱	

4. 層序

本地点の基本層序は、以下の通りである(図12・13・15, 表2・3)。1層は、客土である。2層は、土性により上部の黒色シルト層(2a層)と下部のにぶい黄色シルト層(2b層)に細分可能である。2b層は、黒色シルトを斑状に含み、3層への漸移層である。3層は、土性により上部のにぶい黄色シルト層(3a層)と下部のにぶい黄色粘土質シルト層(3b層)に細分可能である。4層は、にぶい赤褐色細砂～中砂層であるが、場所により粗砂を含む。5層は、粘土と砂が相互に挟在する灰黄褐色砂質シルト層である。これらの地層は、ほぼ水平に堆積してい

た。2a層からは擦文土器と続縄文土器、及び石器、2b層からは少量の擦文土器が出土し、両層が遺物包含層であることが確認された。

本地点の基本層序を隣接する本部裏地点(小杉編2002)のものに対比すると、2b層は本部裏地点の2層上部、3a層は本部裏地点の2層下部、3b層は本部裏地点の3層、4層は本部裏地点の4層、5層は本部裏地点の5層～6層に対応するとみられる(図12)。また、北大標準層序(吉崎編1995)と対比すると、本地点の2層が標準層序I層、3・4層が標準層序II層、5層は標準層序III層に対比できる可能性がある。(坂口)



図 14 事務局非常用自家発電設備地点遺物分布図

5. 遺構

本地点では、竪穴住居址1基、炉址1基、土坑1基、小ピット5基が検出された(図11)。

(1) 竪穴住居址

第1号竪穴住居址(HP 01)

本住居址は、客土を掘削後、基本層序2a・2b層を精査している段階で、調査区西側の258-70グリッドにて検出された(図15)。

本住居址は、隅丸方形とみられるが、その規模は不詳である。床面標高は約14m、床面からの壁高は、0.3m～0.4mである。住居址東側でカマド煙道・煙出し部、及び小ピット5基が検出された。北側のHP 01-3a層を掘削すると貼床とみられる硬化した灰黄色粘土ブロックが確認された。掘り方に凹凸が看取されるのは、軟弱な地盤である基本層序4・5層を掘削し、特に砂層である基本層序4層を取り除いたためであろう。

HP 01の覆土は下記の通り5層に分層される。HP 01-1は、黒色シルト層である。HP 01-2は、にぶい黄褐色シルト層である。HP 01-3aは、黒褐色粘土質シルト層で、炭化物、焼土粒子を微量、動物遺体とみられる骨片が極微量含まれる。HP 01-3bは、にぶい橙褐色粘土質シルト層で、動物遺体とみられる骨片が極微量含まれる。HP 01-4は、にぶい黄褐色粘土質シルト層で、三角堆積土である。HP 01-5は、にぶい黄褐色粘土層で、厚さ10cm～30cmある。既述の通り、地盤である基本層序4・5層が軟弱な砂層や砂質シルト層であるため整地したものである。土壌サンプルを採取し、水洗・浮遊選別法を行った際に微量の雑穀種子、焼けた魚骨片が回収されている。HP 01-5層は貼床層で、その直上は硬化した粘土ブロックが検出され、また後述する煙道部のE4・E5層上面のレベルに近接することから、床面と考えられる。住居址は、基本層序2a層により覆われていた。掘り込み面は、住居址に堆積した層序から基本層序2b層上部と推定される。

カマドは、煙道の位置から東壁に設置していたとみられる。煙道部の規模は、煙出しから調査区西壁までの長さが約1.2m、煙道部の短軸は上場で0.4m前後、下場で0.3m前後ある。煙道部の覆土は7層に分層される。E1・E2層は、煙出し口に陥没し、閉塞していたものである。E1層は、焼土ブロック3mm～5cm大を微量含む。E3層は、基本層序3層が掘削されたとみられる黄褐色シルト層である。E4層は、赤褐色粘土質シルト層である。E5層は、にぶい黄褐色粘土質シルト層である。E6層は、極暗褐色細砂層である。E7層は、にぶい赤褐色細砂～中砂層で、焼土ブロック5cm大を含む。E7層で焼

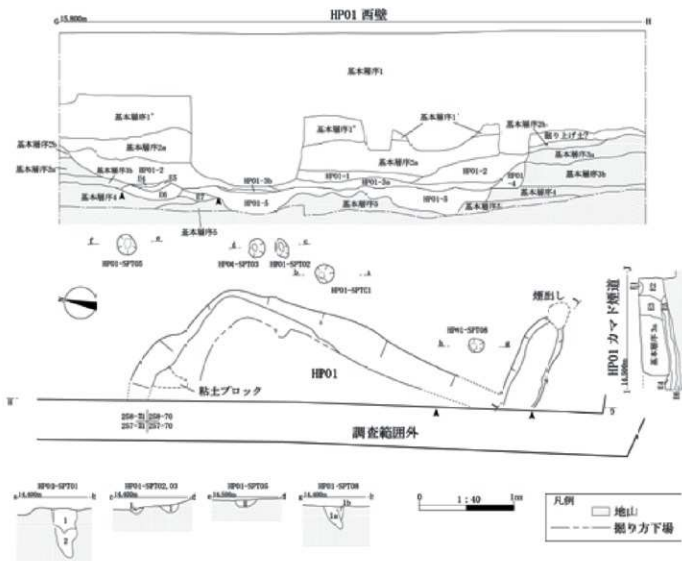


図15 事務局非常用自家発電設備地点検出の竪穴住居址 HP 01

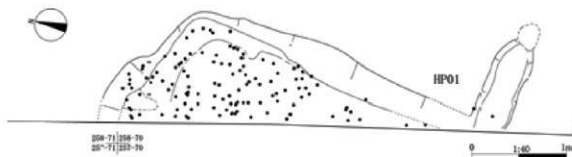


図16 事務局非常用自家発電設備地点 HP 01 の遺物分布

表3 事務局非常用自家発電設備地点 HP 01 土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
HP 01	HP 01-1	7.5 YR 2/1	黒色	シルト	弱	強	焼土粒子1~5mm大を極微量含む。
	HP 01-2	10 YR 3/3	にぶい黄褐色	シルト	中	強	三角堆積土。
	HP 01-3a	5 YR 3/1	黒褐色	粘土質シルト	やや強	弱	炭化物・焼土粒子5mm前後を微量含む。
	HP 01-3b	5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	骨片極微量含む。土層出土。
	HP 01-4	10 YR 6/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	三角堆積土。
	HP 01-5	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	強	
	E 1	10 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	やや強	焼土ブロック3mm~1cm大を微量含む。
	E 2	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト	中	やや強	
	E 3	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	中	強	基本層序3層の汚れた土。
	E 4	2.5 YR 2/1	赤黒色	粘土質シルト	中	やや弱	
	E 5	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	やや弱	
	E 6	2.5 YR 2/2	極暗褐色	細砂	弱	弱	
	E 7	5 YR 4/3	にぶい赤褐色	細砂~中砂	弱	弱	焼土ブロック3cm大含む。
	基本層序 1						客土
	基本層序 1'	10 YR 3/1	黒褐色	シルト	弱	強	客土?
	基本層序 2a	10 YR 1.7/1	黒色	シルト	弱	強	
	基本層序 2b	2.5 Y 6/4	にぶい黄色	シルト	弱	強	
	基本層序 3a	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	シルト	弱	強	
	基本層序 3b	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	粘土質シルト	やや強	やや弱	
	基本層序 4	5 YR 5/4	にぶい赤褐色	細砂~中砂	弱	弱	
基本層序 5	10 YR 5/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強	弱	粘土と砂の互層。	
掘り上げ土?	7.5 YR 4/1	褐色	シルト	弱	中		
HP 01-SPT 01	SPT 01-1	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	中	中	
	SPT 01-2	10 YR 4/1	褐色	シルト	中	やや弱	
HP 01-SPT 02	SPT 02-1	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	中	やや弱	
HP 01-SPT 03	SPT 03-1	10 YR 3/2	黒褐色	シルト	中	やや弱	
HP 01-SPT 05	SPT 05-1	10 YR 4/1	褐色	シルト	やや強	弱	
HP 01-SPT 08	SPT 05-1a	7.5 YR 5/1	褐色	粘土質シルト	中	やや強	
	SPT 05-1b	7.5 YR 6/1	褐色	粘土質シルト	中	中	

土ブロックが観察されることから、燃焼部は調査区外に近接して遺存しているとみられる。カマドは、煙道部に相当する E 4~E 6 層の上に基本層序 3a 層が観察されることから、トンネル式の構造であったと考えられる。なお、E 4~E 6 層の土壌サンプルを採取し、水洗・浮遊選別法を行った際に微量の焼けた魚骨片が回収されている。

本住居址東側の周囲で小ビット 5 基 (HP 01-SPT 01-02・03・05・08) が検出された。不整の円形で、確認面からの深さは 0.1m~0.38m で、ばらつきがみられる。

出土遺物

HP 01 からは、土器片 117 点 (総重量 811.014g)、土製紡錘車 1 点 (22.7g) が出土した。土器片は、擦文土器の甕、坏、鉢である。これらの中から接合資料や、特徴のあるものについて実測図、拓本図を作成した。後述する通り、土器は HP 01 出土のものと同構造出土のものが接合しているが、その場合は、HP 01 出土のものとして図示している。

図 18 は、HP 01-2~4 層出土の土器実測図、拓本図である。1~6 は、甕である。1 は、口縁部と胴部の径がほとんど同じで、口縁が弱く外反する。

7~10 は坏で、7・8・10 は内面が黒色処理されている。

11 は鉢で、胎土は甕のものと類似し、器壁も約 7mm と厚手である。坏に比べ口唇が幅広く面取りをしている。内面は擦痕調整後、ミガキを施しているが、外面は擦痕調整がそのまま看取される。内面に赤色顔料が付着している。

図 19 は、HP 01-5 層出土の土器・土製品実測図、拓本図である。12~18 は、甕である。12 の口唇は面取りされ、口端に沈線が施されている。14 の外面は、縦横位の擦痕調整がそのまま看取される。15 の外面には、2 本の沈線が施されている。16 の外面は、擦痕調整後、ミガキを施し丁寧に調整され、1 本の沈線が施されている。球胴甕の可能性がある。17 の口唇は面取りされている。18 の外面は、横位の擦痕調整がそのまま看取される。

19~28・30 は、坏である。24~26・28・30 のように口縁部と胴部の境で痕跡化したような弱い段を形成したり、27 のようにあいまない沈線を施し、口縁部と胴部を区画するのが特徴である。19・20・22・23・26・27・30 は内面が黒色処理されている。29 は鉢で、胎土は甕のものと類似し、器壁も約 7mm と厚手である。口唇が幅広く面取りをし、口端に幅狭の強いナデを施すことで弱い段を形成する。31 は紡錘車である。断面が台形状で、縁辺に稜を形成する。

HP 01 出土の擦文土器は、HP 01-2~4 層、HP 01-5 層

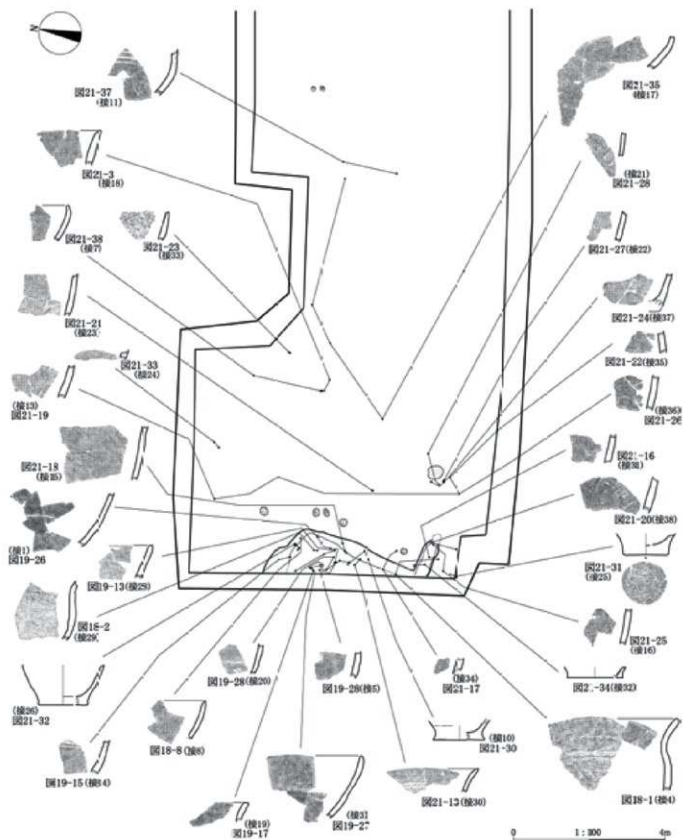


図 17 事務局非常用自家発電設備地点土器接合関係図

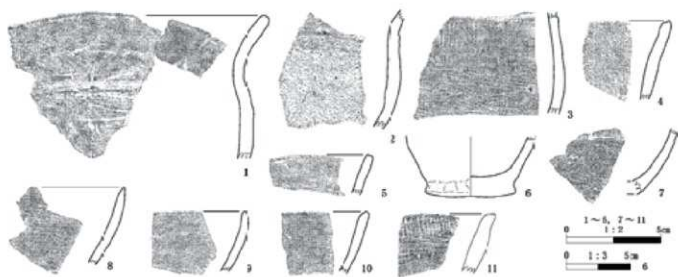


図 18 事務局非常用自家発電設備地点 HP 01-2~4 層出土土器実測図及び拓影図

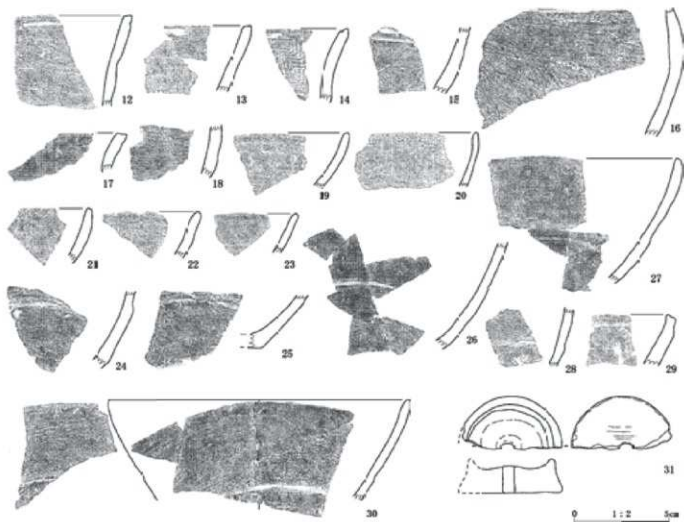


図 19 事務局非常用自家発電設備地点 HP 01-5 層出土土器実測図及び拓影図・土製品実測図

表4 事務局非常用自家発電設備地点HP01 出土土器・土製品観察表

探出 番号	接合 番号	種類	部位	断面 (cm)	口径 (cm)	口径 (cm)	重量 (g)	形状・内容		時期	アフラッド 層位	遺物番号	写真 番号	備考
								外面	内面					
18-1	4	壺	口縁~胴部	-	(15.0)	-	50.8	ココナデ	ココナデ・ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-2層	576	2-1	内面スス付着。
											258-070 基2a層	383, 384		
18-2	29	壺	胴部	-	-	-	20.6	ナデ	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	533, 550	2-2	内面輪痕, 内面凹凸。
18-3	-	壺	胴部	-	-	-	27.9	縦線(弥文前→ナデ)	横線(弥文)	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	544	2-3	
18-4	-	壺	口縁	-	-	-	10.2	ナデ	ココナデ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	543	2-4	
18-5	-	壺	口縁	-	-	-	5.7	ココナデ	ココナデ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	525	2-5	
18-6	-	壺	底部	-	-	(7.0)	92.7	ココナデ	不明	弥文前期	258-070 HP 01-2層	577	2-6	内面スス付着。
18-7	-	坏	胴~底部	-	-	-	8.2	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	567	2-7	内面黑色結核。
18-8	8	坏	口縁	-	-	-	7.0	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 基2a層	271	2-8	内面黑色結核。
											258-070 HP 01-4層	468		
18-9	-	坏	口縁	-	-	-	7.8	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-2層	484	2-9	
18-10	-	坏	口縁	-	-	-	6.5	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	534	2-10	内面黑色結核。
18-11	-	鉢	口縁	-	-	-	10.3	横線(弥文)	横線(弥文→ミゴキ)	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	566	2-11	内面赤色顔料付着。
19-12	-	壺	口縁	-	-	-	15.1	横線→沈線	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	504	2-12	外面輪痕。
19-13	28	壺	口縁	-	-	-	9.8	横線	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	528	2-13	
											258-070 HP 01-5層	521		
											258-070 基2a層	479		
19-14	-	壺	口縁	-	-	-	5.8	縦線(弥文)	横線(弥文→ナデ)	弥文前期	258-070 HP 01-5層	522	2-14	
19-15	14	壺	胴部	-	-	-	7.9	ナデ→沈線	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	538	2-15	
											258-070 HP 01-5層	568		
19-16	-	壺	胴部	-	-	-	37.1	横線→ミゴキ→沈線	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	570	2-16	内面輪痕, 球刺痕?
19-17	19	壺	口縁	-	-	-	6.1	ココナデ	横線(弥文→ナデ)	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	545, 546	2-17	
											258-070 HP 01-5層	465		
											258-070 HP 01-5層	465		
19-18	5	壺	胴部	-	-	-	7.0	横線	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	464, 491	2-18	外面スス付着。
19-19	-	坏	口縁	-	-	-	6.1	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	458	2-19	内面黑色結核。
19-20	-	坏	口縁	-	-	-	8.3	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	519	2-20	内面黑色結核。
19-21	-	坏	口縁	-	-	-	4.4	ミゴキ?	ミゴキ?	弥文前期	258-070 HP 01-5層	490	2-21	
19-22	-	坏	口縁	-	-	-	4.6	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	461	2-22	内面黑色結核。
19-23	-	坏	口縁	-	-	-	2.8	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	556	2-23	内面黑色結核。
19-24	-	坏	胴~底部	-	-	-	11.0	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	517	2-24	
19-25	-	坏	底面	-	-	-	15.6	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	518	2-25	
19-26	1	坏	口縁~胴部	-	-	-	16.6	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-2層	447	2-26	内面黑色結核。
											258-070 HP 01-5層	492, 494, 495		
											258-070 基2a層	13		
											258-070 HP 01-3a層	466, 500		
19-27	3	坏	口縁~胴部	-	-	-	19.5	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	523, 530	2-27	内面黑色結核。
											258-070 HP 01-5層	466, 500		
											258-070 HP 01-5層	446		
19-28	20	坏	胴部	-	-	-	5.0	ミゴキ→沈線	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	493	2-28	
											258-070 HP 01-5層	446		
19-29	-	鉢	口縁	-	-	-	7.3	ナデ	ナデ	弥文前期	258-070 HP 01-5層	528	2-29	
19-30	-	坏	口縁	-	(16.0)	-	49.0	ミゴキ	ミゴキ	弥文前期	258-070 HP 01-3a層	537	2-30	内面黑色結核。
											258-070 HP 01-5層	560		
19-31	-	紡錘車	-	-	-	(5.0)	22.7	ナデ	-	弥文前期	258-070 HP 01-5層	519	2-31	

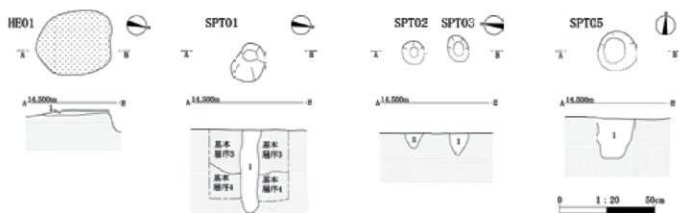


図20 事務局非常用自家発電設備地点検出の炉址・小ピット

表5 事務局非常用自家発電設備地点炉址・小ピット土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
HE 01	1	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	中	やや強	
SPT 01	1	10 YR 4/6	褐色	粘土質シルト	中	中	
SPT 02	1	7.5 YR 4/1	褐灰色	シルト	弱	強	
SPT 03	1	7.5 YR 4/1	褐灰色	シルト	弱	強	
SPT 05	1	2.5 Y 7/2	灰黄色	シルト	弱	やや強	

ともに甕は無文化し、口縁と胴部の径が近接する傾向がみられる。坏も口縁と胴部の境が沈線化、あるいは沈線の痕跡化する特徴が類似し、時間的なまとまりが看取される。

本地点における土器片を接合した結果、32個体の接合資料に識別された(図17,表4・6)。そのほとんどのものが近接して接合しているが、図21-35(接17)、図21-19(接13)のように、飛散したような分布状態を示す接合資料もみられる。

接合資料の内、18個体がHP01に関係するものである。平面的には、HP01出土のものは、ほとんど堅穴住居址出土のものと接合している。層位的には、HP01-3層とHP01-5層出土のものが接合する図19-15・17・27(接14,接19,接3)、HP01-3層,HP01-5層,基本層序2a層のものが接合する図19-13(接28)、HP01-5層と基本層序2a層出土のものが接合する図19-28(接20)、HP01-4層と基本層序2a層出土のものが接合する図18-8(接8)、HP01-5層,HP01-2層,基本層序2a層のものが接合する図19-26(接1)がみられる。土器片の接合関係をみると、接合率が低く土器の碎片化が看取される。特に、図18-8(接8)、図19-13(接28)、図19-26(接1)、図19-28(接20)のように、HP01出土の土器が基本層序2a層出土のものと接合する事例は、本住居址の廃絶後に周囲の遺物が流入していることを示唆する。

本住居址の時期は、貼床層であるHP01-5層出土の甕の無文化する傾向や、坏の口縁部と胴部の境が沈線化、あるいは沈線の痕跡化する特徴から、中田ほか(1999)編年の弥文文化前期(8世紀後半～9世紀)に比定される。

(2) 炉址

炉址(HE01)は、258-70グリッドで基本層序2b層を精査している際に検出した。平面が不整形形の焼土は、規模が長軸0.40m、短軸0.34mである(図20)。基本層序2b層上部が焼けて変色していたが、掘り込みは確認されなかった。

(3) ピット

ピット(PIT01)は、南北に縦断して設置された配管のため、攪乱が著しく調査区北壁断面で確認された(図13)。規模は上場の長軸で約0.44mある。覆土に基本層序2a層が含まれていることから、掘り込み面は、基本層序2b層と推定される。

(4) 小ピット

基本層序3層、あるいは4層まで掘り込まれた小ピット5基(SPT01～05)が調査区東側で分散して検出された(図20)。平面形は不整形形もしくは不整形楕円形を呈する。確認面からの深さは約0.08m～0.44mあり、ばらつ

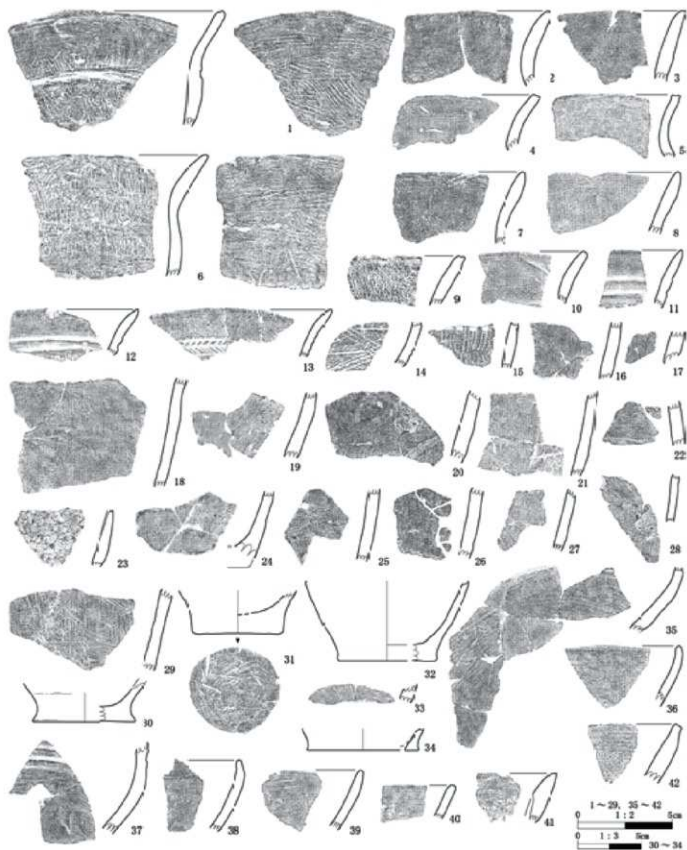


図21 事務局非常用自家発電設備地点包含層出土土器実測図及び拓影図

表6 事務局非常用自家発電設備地点包倉層出土土器観察表

探検番号	結合番号	層種	部位	測高 (cm)	口径 (cm)	直径 (cm)	重量 (g)	断面調整		時期	アクリッド 標記	遺物番号	写真 番号	備考
								前面	背面					
21-1	-	装	口縁~胴部	-	-	-	36.3	口縁部は割部→ナデ	口縁部は割部→ナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	427	3-1	
21-2	-	装	口縁	-	-	-	22.7	ナデ	ナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	341	3-2	
21-3	18	装	口縁	-	-	-	17.0	ナデ	ナデ	縄文前期	259-070 基 2a 層	245, 246	3-3	
21-4	-	装	口縁	-	-	-	10.2	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	431	3-4	
21-5	-	装	口縁	-	-	-	11.0	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	483	3-5	
21-6	-	装	口縁	-	-	-	42.9	楕圓	楕圓形痕	縄文前期	258-070 基 2a 層	448	3-6	内面黒色付着。
21-7	-	装	口縁	-	-	-	16.3	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	253	3-7	
21-8	-	装	口縁	-	-	-	11.2	ヨコナデ	不明	縄文前期	258-070 基 2a 層	440	3-8	内面黒色付着。
21-9	-	装	口縁	-	-	-	10.0	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	400	3-9	
21-10	-	装	口縁	-	-	-	9.0	楕圓形痕→ヨコナデ	楕圓形痕→ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	370	3-10	
21-11	-	装	口縁	-	-	-	5.5	ヨコナデ→穴縁	ヨコナデ	縄文前期	259-070 基 2a 層	292	3-11	
21-12	-	装	口縁	-	-	-	9.7	ヨコナデ→穴縁	ヨコナデ	縄文前期	261-070 基 2a 層	300	3-12	
21-13	30	装	口縁	-	-	-	9.7	ナデ→矢羽状突起・ 塊状穴縁	ナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	405, 430	3-13	
21-14	-	装	胴部	-	-	-	4.3	ナデ→穴縁	ナデ	縄文中期	258-070 基 2a 層	319	3-14	
21-15	-	装	胴部	-	-	-	4.8	楕圓形痕?	楕圓形痕	縄文中期	360-070 基 2a 層	265	3-15	
21-16	31	装	胴部	-	-	-	7.3	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	422, 438	3-16	
21-17	34	装	胴部	-	-	-	2.4	楕圓	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	356, 358	3-17	
21-18	15	装	胴部	-	-	-	32.9	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文	258-070 基 2a 層	474, 475	3-18	
21-19	13	装	胴部	-	-	-	11.2	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層 258-071 21	44, 153-1	3-19	
21-20	38	装	胴部	-	-	-	19.9	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	325, 378	3-20	
21-21	23	装	胴部	-	-	-	12.4	ナデ	楕圓→ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	3, 16	3-21	内面輪模痕。内縁磨合。
21-22	35	装	胴部	-	-	-	5.2	ナデ	ナデ	縄文	258-060 基 2a 層	134	3-22	
21-23	33	装	胴部	-	-	-	5.1	摩耗	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	151-4		
21-24	37	装	胴部~底部	-	-	-	13.1	ナデ	摩耗	縄文	259-070 基 2a 層	285, 287	3-23	
21-25	16	装	胴部	-	-	-	7.5	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	146, 148, 191	3-24	
21-26	36	装	胴部	-	-	-	10.4	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	337, 377	3-25	
21-27	22	装	胴部	-	-	-	4.8	楕圓→ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	151-1, 151-2, 151-3, 153-2, 153-3	3-26	
21-28	21	装	胴部	-	-	-	6.3	楕圓	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	193, 233	3-27	28 同一個体?
21-29	-	装	胴部	-	-	-	29.9	楕圓	楕圓	縄文	258-070 基 2a 層	136, 147	3-28	
21-30	10	装	底部	-	-	-	(8.0)	30.5	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	428, 421	3-29	内面輪模痕。
21-31	25	装	底部	-	-	-	(7.3)	89.6	ナデ	縄文	429, 442-2, 477	3-30	内縁磨合。	
21-32	26	装	底部	-	-	-	(8.0)	123.3	ナデ	縄文	381, 413	3-31	内面輪模痕。	
21-33	24	装	胴部~底部	-	-	-	9.2	ナデ	ナデ	縄文	258-070 基 2a 層	325, 375, 376, 418, 455, 457	3-32	
21-34	32	装	底部	-	-	-	(9.8)	6.3	ナデ	縄文	258-071 77, 78	3-33		
21-35	17	坏	胴部~底部	-	-	-	37.5	楕圓→ミダキ	ミダキ	縄文前期	258-070 基 2a 層 259-060 基 2a 層 259-070 基 2a 層 259-070 基 2a 層	397, 425	3-34	
21-36	-	坏	口縁	-	-	-	6.5	ミダキ	ミダキ	縄文前期	258-070 基 2a 層	323	3-35	
21-37	11	坏	口縁~胴部	-	-	-	13.9	ミダキ→穴縁	ミダキ	縄文前期	259-060 基 2a 層 259-070 基 2a 層	266 195, 201	3-36	
21-38	7	坏	口縁	-	-	-	4.9	ミダキ	ミダキ	縄文前期	258-070 基 2a 層 259-071 基 2a 層	215, 264 109 100	3-37	
21-39	-	坏	口縁	-	-	-	5.6	ミダキ	ミダキ	縄文前期	259-071 基 2a 層	322	3-38	内面黒色処理。
21-40	-	坏	口縁	-	-	-	3.3	ミダキ?	ミダキ	縄文前期	258-071 基 2a 層	102	3-39	内面黒色処理。
21-41	-	鉢	口縁	-	-	-	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	80	3-40	内面黒色処理。
21-42	-	鉢	口縁	-	-	-	7.6	ヨコナデ	ヨコナデ	縄文前期	258-070 基 2a 層	190	3-41	内縁磨合?
										縄文前期	258-070 基 2a 層	454	3-42	



図22 事務局非常用自家発電設備地点包含層出土石器実測図

表7 事務局非常用自家発電設備地点包含層出土石器観察表

巡回 番号	遺物 番号	グリッド	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	被熱	遺存状態	自然面の状態	写真 番号
22-1	157	258-070	基2a	敲石	安山岩	10.7	4.9	3.4	258.6	—	完形	転覆面	4-1
22-2	301	261-070	基2a	敲石	安山岩	8.8	6.0	5.0	312.6	—	土欠	転覆面	4-2
22-3	267	259-070	基2a	台石	安山岩	5.9	5.0	3.1	127.4	○	下欠・右欠	転覆面	4-3
22-4	283	260-070	基2a	台石	安山岩	6.7	5.8	3.2	193.1	—	土欠・下欠・右欠	転覆面	4-4
22-5	224	259-070	基2a	台石	安山岩	10.9	6.4	3.1	263.4	—	右欠	転覆面	4-5
22-6	158	258-070	基2a	台石	安山岩	10.6	7.7	2.4	245.1	—	右欠	転覆面	4-6

きがある。層準からみていずれも擦文文化のものと考えられる。

(坂口)

6. 遺構外出土の遺物

遺構外の基本層序2a層から土器467点(総重量1,949.6g)、石器7点(総重量1,400.5g)、礎5点(総重量430.7g)が出土した。土器は擦文土器466点、縄文土器1点を含む。石器は、敲石2点、台石4点、黒曜石製剥片1点が出土している。基本層序2b層からは、擦文土器2点(総重量13.8g)が出土した。客土・攪乱から

擦文土器78点(総重量314.4g)が出土した。

本地点における遺物の分布は、調査区西側、HP01周辺で密度が高く、調査区東側では減少していく傾向がみられる(図14)。こうした遺物の出土傾向と本地点に近接する本部裏地点、事務局本館屋外排水設備地点から竪穴住居址が検出されていることから、河谷に近い事務局分館・本館西側空間が擦文文化集落址の本体であることを示唆している(図9・10)。

土器

図21に基本層序2a層出土の主な土器実測図、拓本図

を示す。1~34は、壘である。1~5・7・8~10は、短い口縁部が弱く外反する。1は、ヘラ状工具のようなもので、口縁部と胴部の境に雑な沈線を施すことで屈曲部を作出しようとしている。6は、口縁部と胴部の屈曲部は擦痕調整しているため、その境界があいまいで、口縁部と胴部の径も近接している。11・12の口縁部も弱く外反するものとみられ、2本の沈線が施されている。13の口縁部には、矢羽状沈線が施されている。14の胴部には、横「X」状の沈線が施文されているとみられる。15は、北大式で、竹管状工具による横位の刺突が施されている。16~29は胴部である。30~34は底部で、いずれも平底である。30は、粘土板が輪積部分で剝離しており、内傾接合による土器制作が看取される。

35~40は、坏である。38~40は、内面黒色処理されている。35には1本、37には2本の横走沈線が看取される。

41・42は鉢である。42の胎土は壘のものと類似する。器壁は最も厚いところで41が約7mm、42は約8mmあり厚手である。41の口端は尖るように細く、下部に行くにつれ厚手になる。42は口唇を面取りし、口端は外面に強い擦痕調整を施すことでやや薄手に成形している。外面調整は、41がやや粗いナデ、42は擦痕調整が施され、坏に比べ土器製作が全体的に粗雑な印象を受ける。

基本層序2a層出土、擦文土器の壘、坏、鉢は、一部に擦文文化中期(13・14)のものが含まれるが、HP 01出土のものの特徴が類似し、ある程度の時期的なまとまりが看取される。

土器片の接合関係をみると、接合率が低く土器の碎片化が看取され(図17)、二次的な廃棄、堆積状況を示唆する。本地点出土の土器のほとんどが小破片であることも、こうした堆積状況を傍証している。

石器

石器は、ツールについて実測図を作成し、図を掲載している(図22・表7)。1・2は、安山岩製の敲石である。1の下端には、敲打痕が看取される。3~6は安山岩製の台石である。3は被熱を受けている。6の下端には、使用に伴うとみられる剝離痕が看取される。これらの石器は、K 39 遺跡の擦文文化にしばしばみられる石器組成を示している。

(坂口)

7. 自然科学分析の結果

(1) 事務局非常用自家発電設備地点から検出された種子の分析

a. 遺跡の位置と性格

遺跡の名称: K 39 遺跡事務局非常用自家発電設備地点
所在地: 札幌市北区北8条西5丁目

北海道大学構内

発掘調査期間: 2016年9月1日~2016年10月13日

発掘調査面積: 196 m²

調査担当者: 坂口 隆・守屋豊人・本山志郎・高倉 純

遺跡の立地: サクシュコトニ川右岸の平坦面

遺構の年代: 8世紀後半~9世紀

b. 検討対象

本稿は、札幌市K 39 遺跡事務局非常用自家発電設備地点の竅穴住居址(HP 01)から検出された種子の報告である。検討の対象となるのは、ウォーター・フローテーションをへて、一次同定において植物種子の可能性があるとされた炭化物などである。資料は、表8に示す21個の土壌サンプルの試料No.ごとにカプセルにわけて保管されていた。一次同定を経た資料のなかには、多くの炭化材が含まれていた。種子ではないので、本稿では詳述しない。また、HP 01-5層(試料No.25)から1個の昆虫遺体が出土した。酸化状態のため、現代の遺体が混入したものと考えられる。形態・サイズからみて微小な昆虫の胸部と考えられるが、属・種の同定は行っていない。

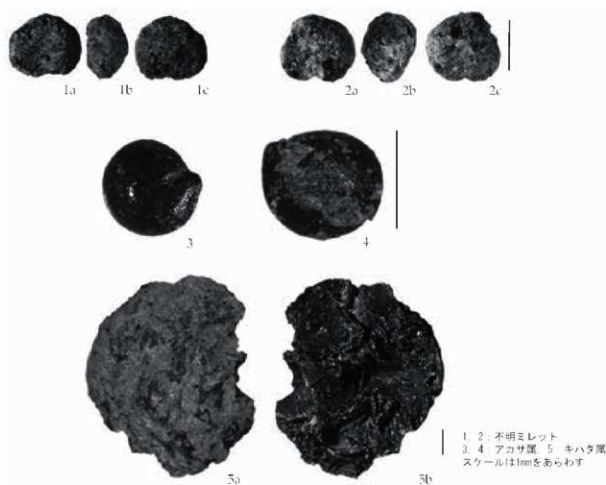
なお、本稿に関わる資料は2016年12月22日に筆者が受領し、2017年1月5日に本レポートとともにすべて北海道大学埋蔵文化財調査センターに返却した。

c. 検出された植物種子(表8)

不明ミレット Indeterminate millets (写真1.1, 2)

雑穀の種子ではあるが、被熱によるダメージで全体の形状が変形しており、ヘソの形態も明確に保存されていないことから種を同定できないもの、HP 01-5層(試料No.22, 28)から2個出土した。ヘソが比較的長く、側面観はヘソ側が細くなっていることからみて、アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv.の可能性が高いと思われるが、キビ *Panicum miliaceum* L.やヒエ属 *Echinochloa* Beauv.の可能性も残されるため形態観察から属・種の同定はできない。写真1.1は長さ1.24mm、幅1.38mm、写真1.2は長さ1.29mm、幅1.43mmである。アカザ属 *Chenopodium* L. (写真1.3, 4)

HP 01-5層(試料No.21, 23, 25)から酸化状態の種子が3個出土した。種子は扁球形で、側面に嘴状に突出したヘソがある。写真1.3は長さ1.03mm、幅0.98mm、写真1.4は長さ1.30mm、幅1.10mmである。



1, 2: 不明ミレット
3, 4: アカサ属 5: キハダ属
スケールは1mmをあらわす

写真1 事務局非常用自家発電設備地点HP 01 出土の植物遺体

表8 事務局非常用自家発電設備地点HP 01 出土の種子分類群一覧

試料 No.	層位	乾燥後 容積 (μ)	不明 ミレット 個	アカザ属 個	キハダ属 個	不明種子 (炭化) 個	不明種子 (発酵) 個	冬芽 個	不明 炭化物 個
18	HP 01-5	5.0							7
19	HP 01-5	4.0							4
20	HP 01-5	5.0				1			4
21	HP 01-5	5.0		1					5
22	HP 01-5	4.5	1			1			3
23	HP 01-5	4.2		1					1
24	HP 01-5	4.0				1		1	1
25	HP 01-5	4.0		1					7
26	HP 01-5	4.8							3
27	HP 01-5	4.5					2		2
28	HP 01-5	3.2	1				4		8
29	HP 01-5	3.5				2			1
30	HP 01-5	5.0			3				2
31	HP 01-5	4.0						1	5
32	HP 01-5	3.1					1		4
43	E 6	0.7					10		
44	E 6	2.0					2		2
45	E 4・5	2.8				2	5		1
46	E 6	0.6					19		
47	E 6	0.6							3
48	HP 01-3a	3.0				1			13

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (写真 1.5)

同一個体と思われる果実の破片が、HP 01-5 層 (試料 No.30) から 3 個確認された。写真 1.5 にはもっとも大きな破片の写真を掲載した。一部発泡しているが、内部に 5-6 個の種子が抜け落ちた痕跡とその表面組織がみえる。写真 1.5 は、長さ (7.45) mm、幅 (5.91) mm である。

不明種子 (炭化) Indeterminate seeds (Charred)

種子ではあるが、被熱による形状・表面組織の変化が著しいために、それ以上の詳細な同定ができないものが HP 01-5 層 (試料 No.20, 22, 24, 29)、HP 01-3a 層 (試料 No.48)、E 4・5 層 (試料 No.45) から 8 個出土した。不明種子 (発泡) Indeterminate seeds (Foamed)

種子ではあるが、被熱による発泡のため、それ以上の詳細な同定ができないものが HP 01-5 層 (試料 No.27, 28, 32)、E 4・5 層 (試料 No.45)、E 6 層 (No.43, 44, 46) から 43 個出土した。大きな破片が多いため、火を受けた堅果類が含まれていると思われる。

冬芽 Winter buds

HP 01-5 層 (試料 No.24, 31) から、2 点が出土した。いずれも破片で特徴的な構造をとらえることが難しく、現生標本との対比が困難であるためより詳細な同定はできなかった。

不明炭化物 Unknown charred materials

種子であることが確定できない炭化物を不明炭化物とした。同定できない炭化種子の破片のほか、菌核なども含まれていると思われる。

d. 若干のコメント

資料は、全体的に被熱によるダメージを大きく受けていた。このため、種子の保存状況が悪く、一部あるいは全体が発泡している資料も少なくなかった。サンプルサイズも小さいため同定できた種のみで本遺跡における種子コンプレックスを判断するのは危険であるが、検出された種子そのものはこれまでも擦文文化期で確認されているものの範疇におさまると考えてよい。

不明ミレットは、これまで擦文文化期で知られている雑穀 (アワ、キビ、ヒエ属) のいずれかである可能性が高い。アカザ属は現生の種子が混入したものと考えられるが、キハダ属は北海道島において縄文文化期以降しばしば種子・果実が出土することで知られている。キハダは樹皮・木がさまざまな方法で利用される植物であるが、果実もしばしば砂糖とともに煮詰めて練菓として利用される (柴田編 1949: 153)。アイヌ文化においても、果実が食用・薬用に用いられるだけでなく、「最も尊い神へ捧げる木幣」をつくるための高貴な樹木に位置づけられて

いる (知里 1976: 103-104)。

今回の資料は、おもに竈穴住居内の貼床と煙道から出土したものであった。北大構内においては発掘面積がそれほど大きくないことも多く、竈穴住居の一部しか調査できないこともめずらしくない。しかし、貼床、煙道、埋土の情報も、カマド燃焼部や炉と比較するために必要であるため、たとえ種子の検出率が低く、また種子のダメージが大きいために、フローテーション法によって情報を収集しつづけることは今後も必要である。

本稿の作成にあたって、北海道大学埋蔵文化財調査センターの坂口隆氏にお世話になった。末筆ではあるが篤くお礼申し上げる。

高瀬克範 (北海道大学大学院文学研究科)

引用文献

- 柴田桂太郎 1949 『資源植物事典』北隆館。
知里真志保 1976 『知里真志保著作集 別巻 1 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社。

(2) 分析に関するコメント

試料は、HP 01 における居住活動の内容に関する検討、当地点における古環境や、K 39 遺跡における栽培植物のデータを蓄積する目的で HP 01-3a 層、HP 01-5 層から土壌サンプルを採取した。土壌の採取から水洗、種実抽出までの作業は、北海道大学埋蔵文化財調査センターで行った。

分析の結果、属・種レベルでの同定は不可能であったが、少量の雑穀種子が検出された。K 39 遺跡では、擦文文化期の栽培植物は、恵庭寮地点竈穴住居 (HP 02・03)、及び「炭化物マウンド」からアワ、コムギ、附属図書館本館再生整備地点の竈穴住居 (HP 01) からキビ、北キャンパス総合研究棟 6 号館地点竈穴住居 (HP 01) と農学部実験実習棟地点竈穴住居 (HP 03) からキビとアワ、国際科学イノベーション拠点施設地点竈穴住居 (HP 01・03) からアワが出土している (Crawford 1986, 佐々木・スダグシャン 2012, 2016a, 2016b)。

擦文文化前期～後期の集落跡であるエムトトンネル地点ではアワとキビが主要な栽培植物とみられる (吉崎・椿坂 2001)。他の地点と同様に遺構により栽培植物の差異や出土量の多寡が看取されるようである。ただし、試料のサンプリング方法 (特に、試料数) は K 39 遺跡でも地点により異なり、サンプリング方法が栽培植物の出土量に影響している可能性も考えられる。遺構による栽培植物の差異や出土量の多寡という事象が、時期、地点、

あるいは居住集団による栽培・野生植物利用の変異なのか、今後、データを蓄積することにより解明していく必要がある。

(坂口)

8. まとめ

本地点の発掘調査は、狭い調査面積ながら竪穴住居址1基が検出されたことで、一定の成果が得られた。本節では、本地点周囲における擦文文化前期集落の変遷や遺跡形成過程を概観することで結びとする。

既述の通り、本地点周辺では本部裏地点、地球環境科学研究科研究棟第2地点、附属図書館ガス引込工事地点、職員厚生施設地点、附属図書館本館再生整備地点で擦文文化前期の竪穴住居址が各1基検出され、サクシュコトニ川上流域における擦文文化前期集落の展開が明らかになりつつある。

サクシュコトニ川上流域左岸に位置する附属図書館本館再生整備地点のHP 01は、本地点周囲では擦文文化の最も古い住居址である。その出土品(図10-8~11)は、壺、球胴壺、坏に古い特徴を有し、K 435 遺跡C地点5'層出土資料(札幌市埋蔵文化財センター編1993:図61など)に対比可能とみられ、8世紀中葉~後葉に位置づけられる(中田裕香氏2016年私信)。

幅狭な有段口縁部に細沈線を施す壺(図10-5)が出土している地球環境科学研究科研究棟第2地点HP 01は、附属図書館本館再生整備地点のHP 01に後続するものとみられる。壺の無文化が顕著になるのが本部裏地点HP 01出土品(図10-12)で、後続するのが事務局非常用自家発電設備地点HP 01出土品(図18-1・4, 図19-12~14, 17)とみられる(中田裕香氏2016年私信)。職員厚生施設地点の竪穴住居址は、壺口縁部に多条の沈線を施す特徴(図10-13・14)から9世紀に位置づけられる。附属図書館ガス引込工事地点のHP 01も坏(図10-7)の特徴から9世紀前後のものとして推定される。

このようにみていくと、本地点周囲における住居址の変遷は、附属図書館本館再生整備地点HP 01→地球環境科学研究科研究棟第2地点HP 01→本部裏地点HP 01→事務局非常用自家発電設備地点HP 01→職員厚生施設地点竪穴住居址、附属図書館ガス引込工事地点HP 01が考えられる(中田裕香氏2016年私信)。

以上の点をふまえると、本地点周囲ではサクシュコトニ川上流域左岸で竪穴住居が設置され、その後、右岸に集落が展開していく様子が窺取される。このように本地点の河谷沿いには、擦文文化前半期(8世紀~9世紀頃)の小規模な集落が展開していたとみられる。

本地点における遺物の分布は、調査区西側、HP 01周辺で密度が高く、河谷から離れていく調査区東側では減少していく傾向がみられるのは、こうした河谷沿いにおける集落の展開とかわるものであろう。また、本地点出土の土器のほとんどが小破片であることや、土器の接合資料は接合率が低く、土器の破片化する傾向が窺取されるのも集落周辺における居住活動と関連したものであろう。

本地点周囲に小規模ではあるが集落が展開した背景には、サクシュコトニ川右岸の平坦面に位置し、水場、河谷沿いの植物資源、遡上する魚類へのアクセスが容易で、遺跡立地として良好な点などがあげられよう。こうした環境的な好条件が整うことで、河谷沿いには遺跡が密集し、擦文文化前期にも本地点周囲は集落として利用されたとみられる。

既述の通り、本地点の竪穴住居址(HP 01)から雑穀種子、附属図書館本館再生整備地点の竪穴住居址(HP 01)からキビが発見されていることから、擦文文化前期には雑穀農耕がおこなっていたのであろう。また、附属図書館本館再生整備地点竪穴住居址(HP 01)ではサケ科の魚骨が検出されているので(阿部2012)、これらの魚類を捕獲し複合的な生業を営んでいたとみられる。

(坂口)

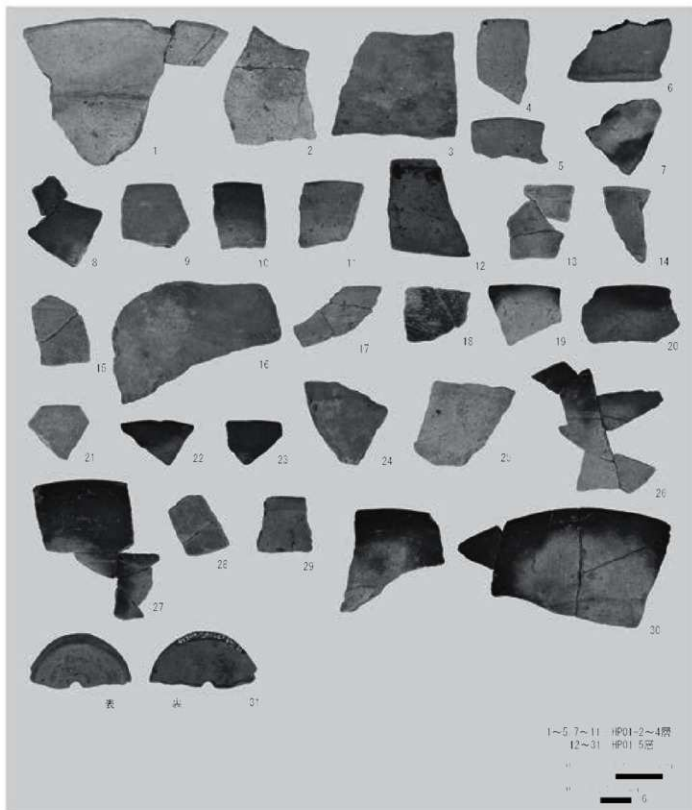


写真2 事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(1)

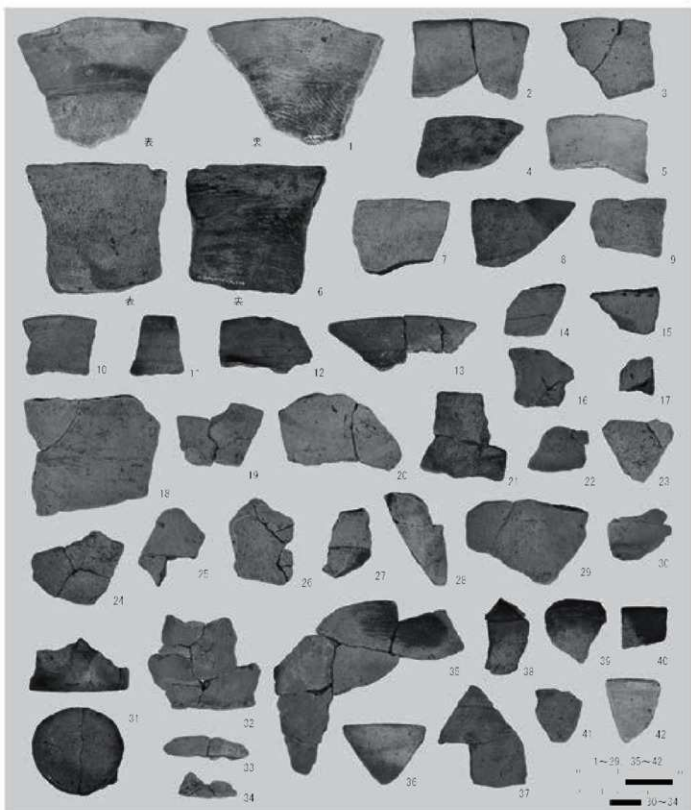


写真3 事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(2)

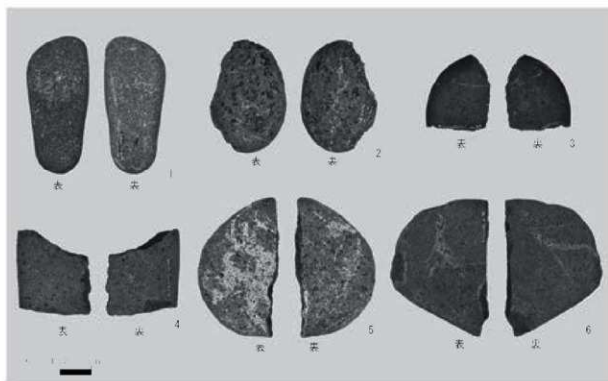
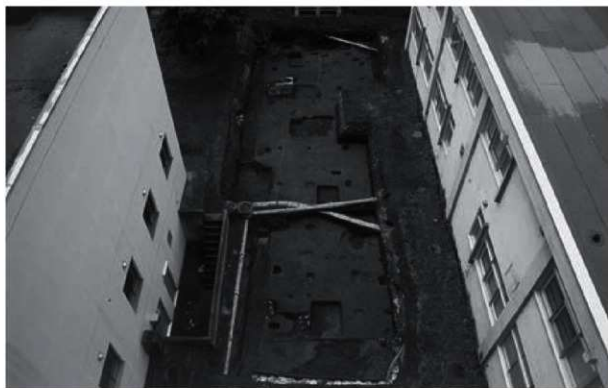


写真4 事務局非常用自家発電設備地点出土遺物(3)



A. 調査区全景 (東より)

写真5 事務局非常用自家発電設備地点の調査(1)



A, HP01 検出 (東より)



B, HP01-3a 屋遺物出土状況 (東より)



C, HP01 床面検出 (東より)



D, HP01 完掘 (西より)



E, HP01 掘道完掘 (南東より)



F, HP01 掘道長軸セクション (南より)



G, 調査区西壁 (東より)



H, 調査状況 (東より)

II-2 K 39 遺跡事務局本館屋外排水設備地点の発掘調査

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

事務局本館屋外排水設備地点（以下、本地点）は、北海道大学札幌キャンパス南東部に所在する。本地点は正門近くの事務局本館の西側に位置する（図9）。本地点は、地形面としては、豊平川扇状地の末端に位置している。本地点の座標位置は北緯43度4分16秒、東経141度20分43秒である。遺物包含層の標高はおよそ14.5mである。本発掘調査を実施したのは平成27年8月24日から9月4日であった。調査対象面積は14m²である。

本地点は、豊平川扇状地末端から北部の沖積平地にひろがるということが確認されている旧等似川水系に分布する続縄文文化～擦文文化の遺跡群の一つに属している。本地点の周辺で河谷に沿う平坦面に立地する地点としては、K39 遺跡中講堂地点（吉崎・岡田編1987）、本部裏地点（小杉編2002）、地球環境科学研究科研究棟第1地点（小泉・林編2000）、同第2地点（小杉編2002）、附属図書館本館再生整備地点（小杉他編2012）がある（図9）。

附属図書館本館再生整備地点を除くと、いずれもいわゆるサクシュコトニ川右岸に立地している。中講堂地点は北大Ⅲ式期、それ以外の地点では擦文文化前期の活動痕跡が残されていた。地球環境科学研究科研究棟第1地点を除くそれぞれの地点では、竪穴住居を残す居住活動が展開されていたことが判明している。各地点の出土土器の諸特徴ならびに実施された放射性炭素年代測定の結果をふまえると、これらの地点は同時的な居住活動によって残されたわけではなく、それぞれの地点での居住活動には若干の時間差があったことが想定できる。そのため、本地点とその周辺では、同じような地形環境に、続縄文文化終末の北大Ⅲ式期から擦文文化前期にかけて繰り返し居住活動が展開されていたことになる。

2. 調査の経緯と方法

北海道大学事務局本館の西側箇所、北海道大学事務局本館新営工事に伴う排水設備その他工事の計画が策定されたことをうけ、工事範囲内に関する埋蔵文化財の取り扱いについて協議が実施された。協議結果に基づき、北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、工事予定地内での埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を、平成27年6月2日～6月9日の期間実施した。試掘調査で

は、工事予定地範囲内に TP 01 から TP 10 までの試掘坑を配置し、調査を実施した（図23）。試掘調査の結果、工事予定地内からは TP 03 で擦文文化の遺構・遺物が確認された。この試掘調査の結果をうけ、あらためて取扱に関する協議が実施された。結果的に、TP 03 近辺を工事範囲から除外することで、当初の工事対象範囲 117 m² から 97 m² に縮小し、ルートを変更する新たな工事計画が示されたうえで、14 m²（TP 04 と TP 02 との間）を本発掘調査の対象とすることが決められた。それに基づき、平成27年7月23日付けで北海道教育委員会に発掘届が提出された。本発掘調査は、平成27年8月24日から平成27年9月4日までの期間、実施された。

本発掘調査では、調査対象とする範囲における地表下0.5～0.6mの深さまでの客土を重機によって除去し、自然堆積物が残されている範囲と近現代の工事等による攪乱が及んでいる範囲とを把握していった。客土中からは第二次世界大戦後に製作されたと考えられる陶磁器で、高台に青色の太田線を施し、底面に「MADE IN OCCUPIED JAPAN」の印をもつ高台付椀（図24）やガラス瓶なども確認されている。地表下1.0mよりも攪乱が深くまで及んでいる範囲が調査区内の大半にひろがっていた（図25）。自然堆積物が残されている範囲に関しては、人力により掘り下げを進め、遺物や遺構の確認をおこなっていった。最終的に掘り下げは地表下0.8～1.0mまで実施している。調査範囲内からは、擦文文化の竪穴住居（HP 01）の一部が検出された。遺構外からの遺物の出土は、客土からの出土を除くと僅かしか認められなかった。竪穴住居に関しては、覆土の掘り下げ、遺構の形態と覆土の堆積状況、遺物の包含状況の確認をおこなっていった。

本発掘調査では、発掘区に設定した方眼を用いて各種の記録をおこなった。方眼は5×5mを基本グリッドとし、北海道大学構内全体を対象として設定したものである。仮想原点の設定は公共座標に対応させておこなっている。緯度44°00'00"、経度142°15'00"を基準点として、X軸方向に-103307.649m、Y軸方向に-74767.738mの地点を発掘区の仮想原点とした。Y軸の方位はN10°55'23"Wである。X軸とY軸の関係は数学系座標と同じであり、それぞれのグリッドにはアラビア数字で記号を付した。遺物の取り上げ、遺構や層序断面の記録などにあたっては、グリッドをもとにトータル・ステーションを使用して座標位置の記録をおこなった。遺物には通し番号を付し、種別や層序を記録した後、三次元座標値の記録をトータル・ステーションでおこない、取り上げている。調査区範囲や竪穴住居等の遺構の平面記録をお

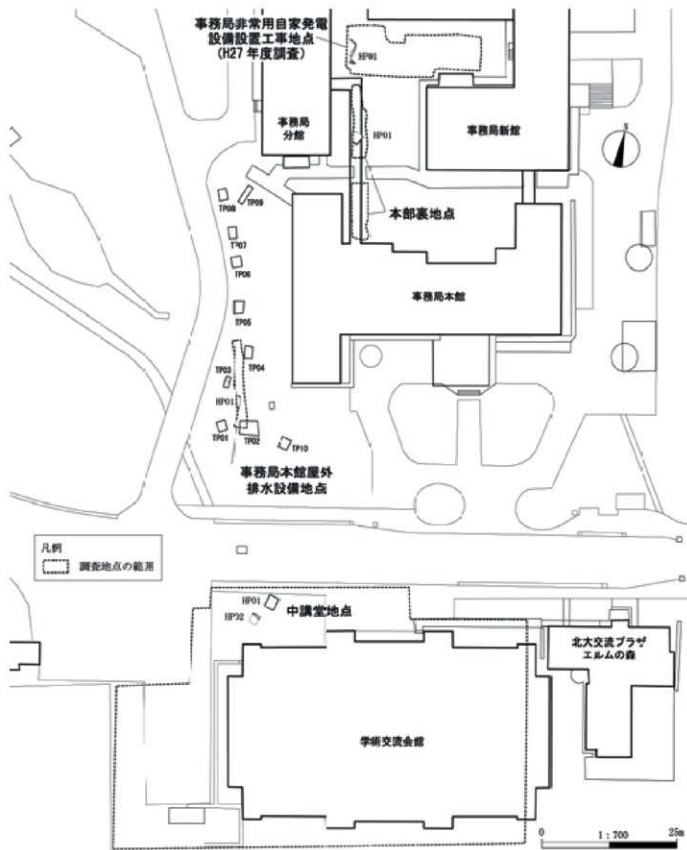


図 23 事務局本館屋外排水設備地点と周辺の住居址

こなう際にもトータル・ステーションを利用した測量を実施している。調査区や遺構の断面図記録は、写真撮影後、手で10分の1スケールを基本に図化した。

3. 層序と古地形

本地点は、豊平川扇状地の末端に位置している。本地点が立地している微地形面は、いわゆるサクシュコトニ川右岸の平坦面であり、現地形や周辺での過去の発掘調査の成果（とくにK 39 遺跡跡附属図書館本館再生整備地点）をふまえると、縄文文化後半期から擦文文化の段階にかけては、本地点の西側に接して河谷があったことが想定できる。しかし、今回の発掘調査の範囲内からは、そうした河谷は検出されなかった。

本地点で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、層序の区分と記載を実施した。

本地点の基本層序は、1層から4層までに区分された。調査区の西壁で確認された土層断面を図26に示す。1層は客土である。コンクリート・ガラやガラス瓶、陶磁器等を含む。2層は暗褐色のシルトである。土壌化の影響が認められた。3層は褐色のシルトである。4層は暗赤褐色の細粒～中粒砂である。4層は西壁断面では確認されていないが、後述する竪穴住居址（HP 01）の覆土を断面で観察する際に3層の下位で堆積が確認されたものである。2～4層の

相互の接触面は漸移的であり、堆積環境に大きな変化はなく連続的に形成されたことを示している。2層からは僅かだが擦文土器が出土しており、この層が擦文文化の遺物包含層といえる。HP 01の周辺では2層は削平されており、確認さ



図24 事務所本館屋外排水設備地点出土陶磁器の実測図及び写真

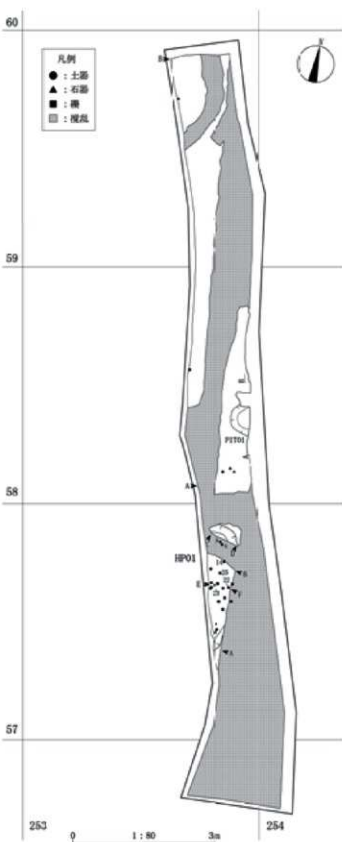


図25 事務所本館屋外排水設備地点遺構と遺物の検出状況

れなかった。HP 01 は3・4層を掘り込んで構築されていたが、掘り込み面は削平により確認できなかった。

4. 遺構

本地点の発掘調査では、遺構として竪穴住居跡が1基(HP 01)、土坑が1基(PIT 01)検出された(図25)、いずれも1層を除去した段階で確認されている。竪穴住居跡は縄文文化のものと考えられる。

(1) 竪穴住居跡

調査範囲内より1基(HP 01)が検出された。HP 01は、トレンチ状の調査区である関係から、住居跡の北東側の一部を調査したにとどまっている。平面形は隅丸方形であったと推定される。全体の大きさは正確にはわからないが、周辺での試掘調査の結果をふまえると、一辺がおおよそ5m程度ではなかったかと推定される。確認面から床面までの深さはおよそ0.5mあった。床面の標高は約14.5mである。カマドや柱穴は検出されなかった。カマドは攪乱により破壊されている可能性が高い。覆土は1層から5層までに区分された(図27)。1層は1a層から1c層まで、2層は2a層と2b層、4層は4a層と4b層に細分された。1層はシルト、2・3層はシルトもしくは極細粒砂質シルト、4層は砂、5層はシルトである。5層は炭化物や焼土粒を含むが、住居跡内の一部の範囲からのみ確認されている。本住居跡ではカマドは確認されていないが、

東へ南東の一辺にカマドが設けられていたとすると、本調査で確認された住居跡のすぐ東側の攪乱範囲にカマドが本来あった可能性が想定されることになる。したがって、5層に含まれていた炭化物や焼土粒はカマドに由来するものである可能性が指摘できる。ちなみに後述する放射性炭素年代測定のための試料はこの層から採取された。4層から1層にかけては、上方へ向けてマトリクスが細粒化しており、間隙なく漸移的に堆積が進行していったことがうかがえる。1・2層では土壌化の発達が認められており、1層の堆積後に堆積作用の中断がみられた可能性が高い。住居跡内からの遺物の出土は、1層から5層まで確認されたが、多くは覆土4～5層に含まれていた。堆積過程に関する上述の推定を前提とすると、遺物は、住居として利用されていた時期に比較的近接した時期に残されていたものである可能性が指摘できる。

HP 01の覆土で出土した遺物は縄文土器が17点、礫が4点である。土器は、1層から壺の胴部が2点(計12.4g)、2層から壺の胴部が1点(1.5g)、3層から壺の口縁部が1点(46.4g)、壺の胴部が1点(2.3g)、4層から環の口縁部が1点(14.2g)、壺の胴部が7点(計88.5g)、5層から壺の口縁部が2点(計4.0g)、胴部が2点(計16.1g)出土した。礫は安山岩製4点(計4,633.4g)であり、4層からの出土である。

代表的な土器を図28に示す。図28-1～5はHP 01の

覆土から出土した。長胴壺では、口縁部や胴部上半にそれぞれ1本の沈線文を配しているものが認められる(図28-1)。口縁部は外側に強く反り、口唇部近くになって上方に立ちあがる。口唇部の断面形は角形をなしている。図28-2の資料も同一の器形をなしていた可能性が高い。図28-3・4も長胴壺の胴部破片である。環では、口縁部破片だが表裏が赤彩されたものが出土している(図28-5)。全体的に器壁が薄く、表裏面には横方向のミガキが観察される。口縁部直下で屈曲し、垂直方向に立ちあがる器形をなしている。胎土は緻密で、これまで北海道大学構内の遺跡から出土する縄文土器の環に通例の砂等は含まれていない。

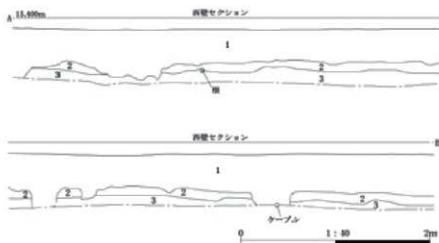


図26 事務局本館屋外排水設備地点堆積状況

表9 事務局本館屋外排水設備地点層序観察表

層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
1	赤土					
2	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	やや弱	中	
3	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	弱	やや弱	
4	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	

(2) 土坑

HP 01 の北側へ 2 m 離れた位置から PIT 01 が検出された(図 29)。東側は未調査である。基本層序の 3 層を掘

り込んで構築されていた。掘り込み面は不明である。平面形は円形で、断面形は皿形を呈している。西側半分を調査したにとどまっているが、径は約 0.7 m、確認面から坑底面までの深さは約 0.2 m であった。覆土は 2 層に細分された。いずれもマトリクスはシルトである。炭化物や遺物は含まれていなかった。基本層序との関係、および周辺での既存の調査状況を考えると、擦文文化もしくは統縄文文化北大式期のものである可能性が高いが、HP 01 との前後関係も含め、細かな帰属時期を特定することはでき

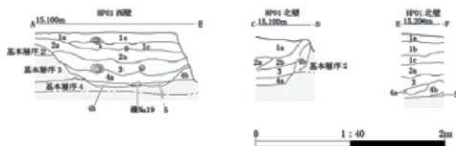


図 27 事務所本館屋外排水設備地点検出の HP 01 土層断面図

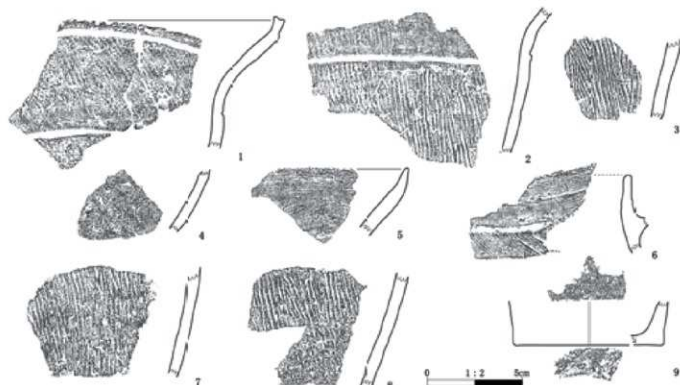


図 28 事務所本館屋外排水設備地点出土の土器実測図及び拓影図

表 10 事務所本館屋外排水設備地点検出の HP 01 層序観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
HP 01	1a	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	やや弱	中	
	1b	10 YR 3/2	黒褐色	シルト	中	中	
	1c	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	やや弱	中	
	2a	7.5 YR 2/3	極暗褐色	砂質シルト	中	やや弱	
	2b	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	中	やや弱	
	3	5 YR 3/4	暗赤褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	やや弱	
	4a	10 YR 3/3	暗褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4b	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	極細粒砂	やや弱	弱	
	5	7.5 YR 2/3	極暗褐色	シルト	中	やや弱	炭化物(径2~4mm)、焼土粒子をやや微量含む。

表 11 事務局本館屋外排水設備地点出土土器観察表

探図 番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	器面調整		時期	層位	遺物 番号	写真 番号	備考
							外面	内面					
28-1	壺	口縁部	—	—	—	46.4	沈線文(横)：口縁部1本・ 胴部1本、ハケメ	ハケメ	縄文前期	覆土3	25	7-1	
28-2	壺	胴部	—	—	—	52.5	沈線文(横)：胴部1本、ハ ケメ	ハケメ	縄文前期	覆土4a	8, 9	7-2	
28-3	壺	胴部	—	—	—	13.6	ハケメ	ハケメ	縄文	覆土5	23	7-3	
28-4	壺	胴部	—	—	—	9.5	ナデ(横)	ナデ(横)	縄文	覆土4a	14	7-4	
28-5	坏	口縁部	—	—	—	14.2	ミガキ(横)	ミガキ(横)	縄文前期	覆土4a	22	7-5	赤彩
28-6	受け口付土器	口縁部	—	—	—	20.7	ナデ(横)、ハケメ	ハケメ	縄文前期	1		7-6	
28-7	壺	胴部	—	—	—	28.1	ハケメ	ハケメ	縄文	1		7-7	
28-8	壺	胴部	—	—	—	25.2	ハケメ	ハケメ	縄文	1		7-8	
28-9	壺	底部	—	—	8.0	11.5	ナデ(縦)	ナデ(横)	縄文	1		7-9	

表 12 事務局本館屋外排水設備地点検出の PIT 01 土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
PIT 01	1	10GY 2/1	緑黒色	シルト	やや弱	中	
	2	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	中	中	7.5 YR 2/2 黒褐色シルトをブロック状に含む。

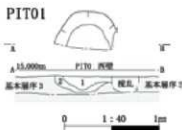


図 29 事務局本館屋外排水設備地点検出の PIT 01

図 30 事務局本館屋外排水設備地点出土の
石器実測図

なかった。

5. 遺物

遺構外の基本層序2層からは土器が2点、石器が3点出土している。土器はいずれも縄文文化の長胴壺の胴部資料である(計10.7g)。石器は、黒曜石製の剣片が1点(3.0g)、砕片が2点(計0.2g)である。図30に剣片を図示した。

これ以外の遺物は、いずれも客土(基本層序1層)からの出土である。縄文文化の長胴壺の口縁部2点(計22.6g)、胴部35点(計196.2g)、底部1点(11.5g)、坏が口縁部1点(1.2g)、受け口付土器の口縁部が1点(20.7g)である。

代表的な土器を図28に示す。図28-6は受け口付土器の口縁部資料である。口縁部の内側についていた鈎の残骸が残っている。鈎の断面形は「I字形」になるものである。図28-7・8は壺の胴部資料、図28-9は壺の底部資料である。

(高倉)

表 13 事務局本館屋外排水設備地点出土石器観察表

探図 番号	遺物 番号	大グリッド	中グリッド	小グリッド	層位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	被熱	遺存状態	自然面の状態	写真 番号
30-1	2	253-58	2	2	2	剣片	黒曜石	2.1	2.3	0.8	3.0	—	完形	転覆面	8-1

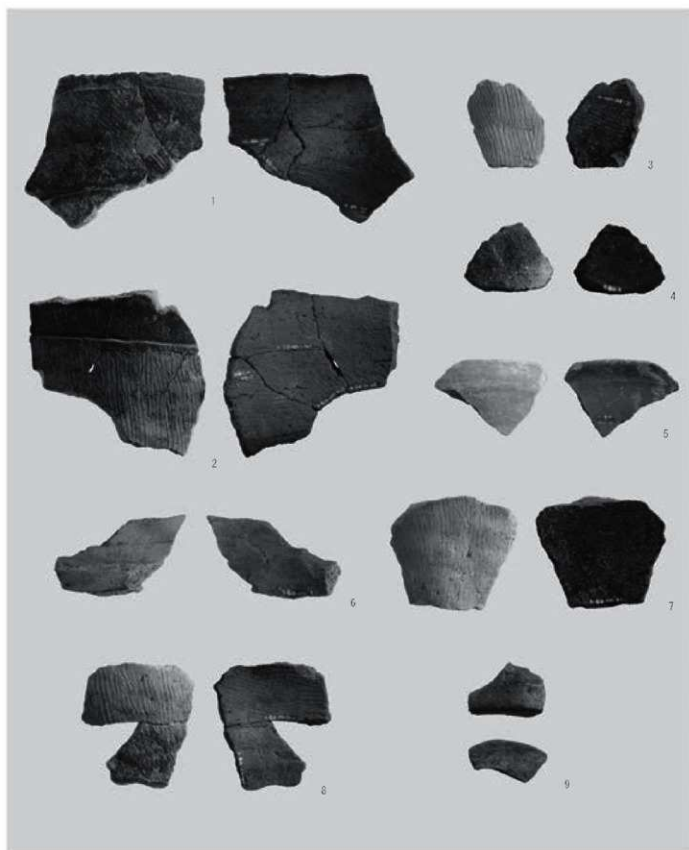


写真7 事務局本館屋外排水設備地点出土の土器



写真8 事務局本館屋外排水設備地点出土の石器

6. 自然科学分析の結果

(1) 放射性炭素年代測定

a. はじめに

北海道札幌市に位置する K 39 遺跡の事務局屋外排水設備地点から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

b. 試料と方法

試料は、堅穴住居址である HP 01 から出土した炭化材 2 点 (試料 No.1 : PLD-30352, 試料 No.2 : 30353) である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていないかった。

測定試料の情報、調製データは表 14 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5 SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

c. 結果

表 15 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 31 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD 1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記し

表 14 事務局本館屋外排水設備地点の放射性炭素年代測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30352	遺構 : HP 01 層位 : 5 層 試料 No.1	種類 : 炭化材 試料の性状 : 最終形成年輪以外部位不明 状態 : dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 N, 水酸化ナトリウム : 1.0 N, 塩酸 : 1.2 N)
PLD-30353	遺構 : HP 01 層位 : 5 層 試料 No.2	種類 : 炭化材 試料の性状 : 最終形成年輪以外部位不明 状態 : dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 N, 水酸化ナトリウム : 1.0 N, 塩酸 : 1.2 N)

表 15 事務局本館屋外排水設備地点の放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30352 HP01 試料 No.1	-24.45 \pm 0.20	1329 \pm 19	1330 \pm 20	660-682 cal AD (68.2%)	652-710 cal AD (87.3%) 746-764 cal AD (8.1%)
PLD-30353 HP01 試料 No.2	-25.45 \pm 0.27	1321 \pm 23	1320 \pm 25	659-690 cal AD (59.1%) 751-760 cal AD (9.1%)	655-715 cal AD (77.6%) 743-766 cal AD (17.8%)

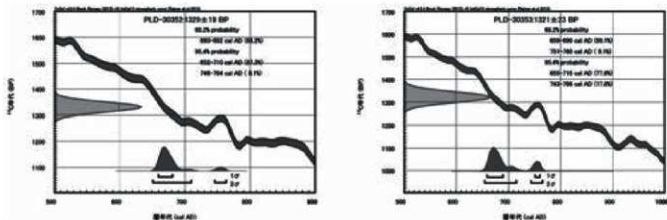


図 31 事務局本館屋外排水設備地点暦年較正結果

た¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal 4.2(較正曲線データ: IntCal 13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

d. 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

HP 01の試料No.1(PLD-30352)は652-710 cal AD(87.3%)および746-764 cal AD(8.1%)、試料No.2(PLD-30353)は655-715 cal AD(77.6%)および743-766 cal AD(17.8%)で、いずれも7世紀中頃～8世紀後半の暦年代を示した。これらは、擦文文化に相当する。

なお、今回の試料はいずれも最終形成年輪を含めて測定が行われていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料はいずれも古木効果の影響を考慮する必要がある。

引用文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A. G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W.,

Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

[II-2-6(1) 伊藤 茂・安岡俊・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林基一・Zaur Lomtadze・小林克也(株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ)]

(2) 自然科学分析結果に対するコメント

HP 01の覆土5層から採取した炭化物を試料として2件の放射性炭素年代測定を実施した。1,330±20(PLD-30352)と1,320±25(PLD-30353)という測定結果が得られた。2σの暦年較正では7世紀中葉から8世紀中葉ということになる。適正に前処理が実施された試料を測定しており、なおかつ同一層準・遺構で採取された試料を用いた2件の測定で、近接した年代の結果が得られたことから、竅穴住居址の利用年代を推定するうえで有意なデータと考えられる。

7. まとめ

HP 01から出土した土器群は、覆土の1層から5層まで出土しており、層的に一括性を保証するわけではない。ただし、覆土4～5層からより多くの資料が出土していること、堆積過程に関する上述の推定を前提とすると、土器群は比較的近接した時期の所産である可能性が指摘できる。出土した長胴甕は、千歳市丸山遺跡(田村編1994)出土資料と形態や調整等で共通点が多い。年代測定は、カマド採取の試料を測定したわけではないが、覆土5層中の炭化物や焼土粒の成因をふまえると、HP 01の帰属年代を推定するうえで有意なデータである可能性があり、土器群が有する諸特徴の対比・位置づけとも整合することは注目を要しよう。

図25の坏に関しては、表裏の赤彩や調整、胎土、器形などを見る限り、これまで道内で確認されている事例に対比できるものは見出しがたい。1点のみであるので確言はできないが、東北地方で確認されている「関東系土器器」の可能性を指摘しておきたい。

これまで実施されてきた発掘調査によって、本地点の周辺では北大三式期から擦文文化前期にかけての居住活動が、若干の時間差をもちつつ繰り返して実施されていたことがわかっている。本地点での活動痕跡の時期および性格に関するデータは、扇状地末端の河川上流部において展開されていた当該期の居住活動を把握するうえで一定の意義をもつ。

(高倉)



A. 調査区西壁(1)



B. 調査区西壁(2)



C. PIT 01 検出状況 (東より)



D. HP 01 露出土状況 (東より)



E. HP 01 セクション西壁 (東より)



F. 完掘状況 (南より)

写真9 事務局本館屋外排水設備地点の調査

II-3 K39 遺跡旧留学生センター改修地点の調査

1. 調査地点の位置と周辺での過去の調査

本地点は、北海道大学構内の南、農学部本館の南東側、北緯 43 度 4 分 11 秒、東経 141 度 20 分 26 秒に位置する。遺構・遺物包含層の標高は約 15.5 m～15.6 m であった。

本地点の周辺には、統縄文文化末期、擦文文化の遺構、遺物を発見した地点がみられる(図 32)、本地点の北側に隣接して平成 5 年度に調査がおこなわれた K39 遺跡留学生センター地点(吉崎編 1995)、本地点の北西約 350 m の位置には、平成 26 年度に調査をおこなった K39 遺跡農学部実験実習棟地点(小杉他編 2016)がある。留学生センター地点では、調査範囲北側、地表下約 0.4 m～約 0.5 m の深さで沢状の窪地が発見され、その覆土から統

縄文文化末期の土器片、擦文土器片、黒曜石製石器、礫といった総数 29 点の遺物が発見された。農学部実験実習棟地点では、統縄文文化末期の土坑 20 基、炉址 6 基、擦文文化前期～後期の竪穴住居址 4 基などとともに、統縄文土器片(後北 C2-D 式、北大式)、擦文土器片、黒曜石製石器、礫などを確認した。統縄文文化末期の土坑の多くは、平面形が円形(直径 1 m)、深さ約 0.4 m～0.8 m の規模であった。一部の土坑の覆土からは、拳大もしくは人頭大の礫が出土し、それらは土壌基と考えた。

(守屋)

2. 調査の概要

平成 27 年度、旧留学生センター建物の改修工事が計画され、協議をおこなった。工事予定地の内、一部(冷媒配管部分:地表下約 1 m の深さまで掘削)は、平成 5 年の調査後、建物が建てられた留学生センター地点と重複し、その他(室外機基礎設置部分:地表下約 0.9 m の深さまで掘削)は、留学生センター地点の南側に隣接して

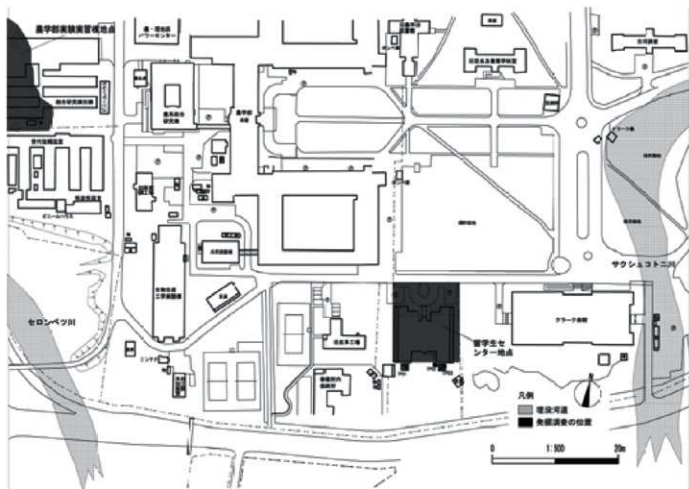


図 32 旧留学生センター改修地点の発掘調査位置

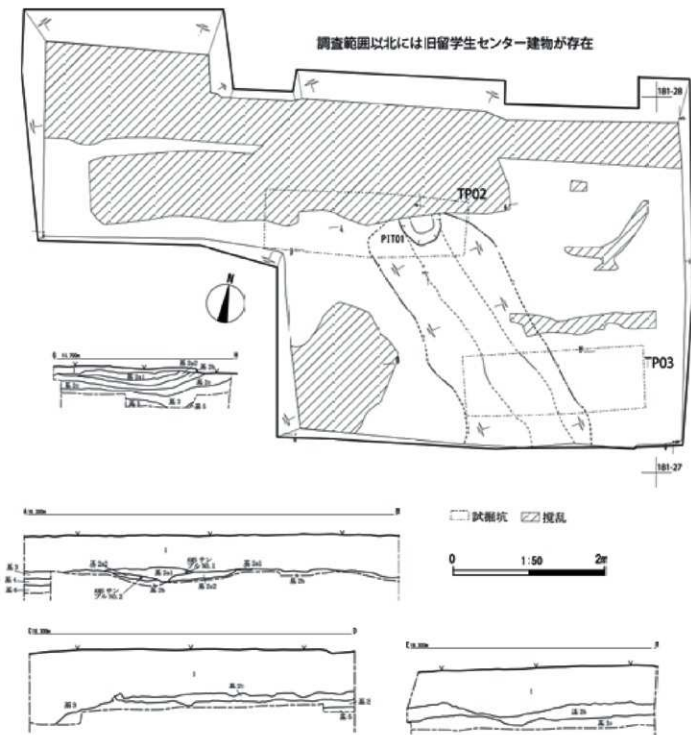


図 33 旧留学生センター改修地点発掘調査範囲の平面図及びセクション図

いた。北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会の調査専門部会において、工事内容に対する埋蔵文化財の取り扱いが審議された。その結果、冷媒配管部分などについては立会調査が必要とされ、室外機基礎設置部分で

は、留学生センター地点で確認された遺物包含層が広がっている可能性が高いことから、試掘調査が必要と判断された。

試掘調査では、東西二か所に分かれる室外機基礎設置

表 16 旧留学生センター改修地点基本層序観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
	1						
	2a1	10 YR 2/1	黒色	粘土質シルト	中	中	
	2a2	10 YR 2/3	黒褐色	粘土質シルト	中	やや強	
	2b	10 YR 4/4	褐色	粘土質シルト	やや強	やや強	
	2c	10 YR 4/4	褐色	砂質シルト	弱	やや強	
	3	10 YR 4/6	褐色	粘土質シルト	中	中	
	4	10 YR 6/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	やや弱	細砂を挟む。
	5	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや弱	やや弱	

部分に対して、西側基礎設置部分で試掘坑 1 基 (TP 01: 縦 2.5 m × 横 1 m × 深さ 1.4 m)、東側基礎設置部分で試掘坑 2 基 (TP 02 および TP 03: 縦 2.5 m × 横 1 m × 深さ 1 m) を設定し、旧地形、地層の堆積状態、遺構・遺物の有無を確認した。

東側基礎設置部分での試掘調査では、地表下約 0.5 m の深さで統縄文化末期の土器片 1 点、礫 6 点が黒色粘土質シルト層から発見された一方、西側基礎設置部分では、旧地形がとらえられたが、遺構・遺物は確認されなかった。

試掘調査の結果に基づいて、北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会の調査専門部会が取り扱いを検討した結果、遺構・遺物が発見された東側基礎設置部分に対しては、建物建設の工事予定位置が変更しない限り発掘調査が必要との所見が示され、西側基礎設置部分に対しては慎重工事による対応が必要との所見が示された。工事関係者がその所見を受けて工事計画の再検討をおこなったが、東側基礎設置部分の工事予定位置および範囲は変更できないとのことであった。それらの経緯から、平成 27 年 9 月 24 日～10 月 9 日までの期間、東側基礎設置部分 (約 31 m²) で発掘調査を実施した。

発掘調査範囲では、構内全域を経緯に区分したメッシュによって基本グリッドを設定し、調査を実施した。基本グリッドは 5 m 四方の範囲を大グリッド、それを 25 分割した 1 m 四方を中グリッド、中グリッドを 4 分割した小グリッドを設定した (基準点はグリッドの左下である)。

発掘調査では、重機によって調査対象範囲内の表土を取り除いた後、人力によって掘削をおこなった。調査対象範囲と調査対象外の境界線に沿って幅 60 cm のトレンチを設定して、速やかな土層堆積の把握や、留学生センター地点 (吉崎編 1995) でとらえられた地層堆積との対比をおこなった。確認した遺構・遺物は発見状態を観察、写真撮影して、測量基準点と光波測距儀とによって座標をとらえて、分布状態や位置を記録した。調査範囲

や各遺構の土層堆積は、基準標高を水系で設定して、手取りで測り、断面図を作成した。出土状態の調査や記録をおこなった後、埋め戻して現地調査を終了した。

調査の結果、後述するように 2a 層から、遺構として土坑 1 基を確認し、遺物として統縄土器片、礫、琥珀片の総数 19 点を確認した (図 33, 35)。

(守屋)

3. 層序

本地点における地層は、調査をおこなった範囲で大きく 5 枚に区分され、基本層序として算用数字で示した。上位から 1 層～5 層と表記する (図 33, 表 16)。

1 層は客土である。2 層は、2a1 層、2a2 層、2b 層、2c 層に細分できた。2a1 層は、黒色の粘土質シルト層で、窪地内に堆積していた。2a1 層からは、統縄土器片、礫が発見された。2a2 層は、黒褐色もしくは褐色の粘土質シルト層で、窪地内にだけみられた。2b 層は褐色もしくはにぶい黄褐色の粘土質シルト層である。2c 層は、褐色の砂質シルト層で窪地部分において傾斜堆積していた。3 層は、褐色の粘土質シルト層、4 層は灰黄褐色の粘土質シルト層、5 層は、にぶい黄褐色の砂質シルト層である。2a 層は標準層序の I 層対応、2b 層～5 層は、標準層序の II 層に対応すると考える。

また、発掘調査の範囲内では、溝状の窪地を確認した。南東から北西方向に傾斜する窪地内では、基本層序 2 層～基本層序 5 層が落ち込んでいる状態を断面観察でとらえた。そのことから、窪地は遺構ではなく、旧地形と判断した。基本層序 5 層より下位に埋没河道が存在する可能性が高い。

(守屋)

4. 遺構

本地点では、基本層序 2b 層を掘り込んだ土坑 1 基を確認した。以下では、遺構の説明をおこなう。

表 17 旧留学生センター改修地点 PIT01 土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	混入物など
PIT 01	覆土 1	10 YR 4/4	褐色	粘土質シルト	中	やや強	直上に礫を含む、砂粒、褐色粒子、黒色粒子を含む、
	基 2a1	10 YR 2/1	黒色	粘土質シルト	中	中	φ 0.5 cm の褐色粒子を含む、
	基 2a2	10 YR 4/4	褐色	粘土質シルト	中	中	φ 0.3 cm の黒色粒子を含む、
	基 2b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	やや強	
	基 2c	10 YR 4/4	褐色	砂質シルト	やや弱	中	
	基 3	10 YR 5/6	黄褐色	粘土質シルト	中	中	

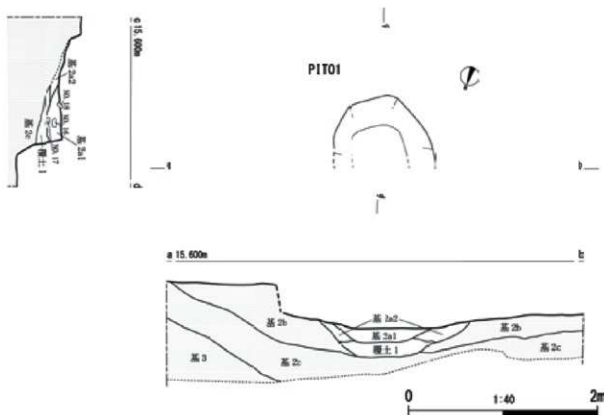


図 34 旧留学生センター改修地点 PIT 01 の平面図及びセクション図

(1) 土坑

a. 第 1 号土坑 (PIT 01)

PIT 01 は、調査範囲中央部において基本層序 2b 層直上で確認した。全体の約半分が留学生センター建設工事の際に削平されていた。平面は、長軸 1m 以上、短軸約 1m の楕円形と推定する。PIT 01 にみられた土層は覆土 1 層だけで、その層では黒色粒子、砂粒が含まれていた。PIT 01 の覆土 1 層の上位には、基本層序 2a1 層、2a2 層が堆積していた。覆土からは、礫 11 点 (安山岩 8 点 : 262.19g, 砂岩 2 点 : 42.36g, レキ岩 1 点 40.54g), 琥珀片 1 点 (重量計測不可) が発見された。図 35 : 1~3 に

主要な遺物を図示した。琥珀片については、発見時は小玉状であったが、取り上げ時に粉々となってしまい、図示できなかった。PIT 01 は、平面の規模が 1m 以上であること、礫および琥珀片が覆土内で発見されたことから、統観文化末期の墓塚と推定する。

(守屋)

5. 遺物

遺構以外の調査範囲では、総数 7 点 (130.52g) の遺物が発見された。その内訳は、遺構外出土土器が 1 点 (21.74g)、遺構外出土礫が 6 点 (108.78g) である。

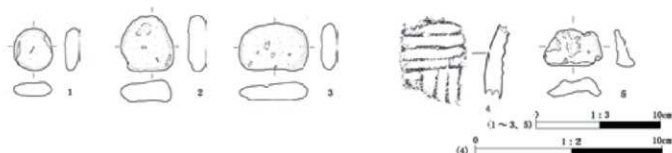


図 35 旧留学生センター改修地点出土物の実測図及び拓影図

表 18 旧留学生センター改修地点 PIT 01 出土礫観察表

押印番号	遺物番号	層位	グリッド	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	被熱	遺存状態	写真番号	備考
35-1	9	PIT 01 覆土1層	180-27	安山岩	44.0	42.0	16.0	43.08	無し	完形	10-1	
35-2	8	PIT 01 覆土1層	180-27	安山岩	34.0	33.0	11.0	16.86	無し	完形	10-2	
35-3	15	PIT 01 覆土1層	180-27	安山岩	42.0	54.0	14.0	44.31	無し	完形	10-3	

表 19 旧留学生センター改修地点遺構外出土土器観察表

押印番号	発掘番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	断面調整		時期	層位・グリッド	遺物番号	写真番号	備考
								外面	内面					
35-4	-	壺	胴部	-	-	-	21.7	穿孔	磨面	統縄文 (北大)	基 2a1 層 180-27	7	10-4	

表 20 旧留学生センター改修地点遺構外出土礫観察表

押印番号	遺物番号	層位	グリッド	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	被熱	遺存状態	写真番号	備考
35-5	3	基 2a1 層	180-27	安山岩	29.0	46.0	14.0	25.13	無し	完形	10-5	

(1) 土器

遺構外で出土した土器片は、統縄文文化末期の北大式土器で、深鉢の口縁部片である(図 35-4)。外面には、横位および縦位の微隆起線文がみられる。上端には、円形刺突文列を確認した。内面は横位のナデ調整がされている。

(2) 礫

遺構外で出土した礫は、6点(108.78g)である。図 35-5 の礫は、安山岩である。

6. まとめ

本地点の調査によって、北大式期の地点の広がりがさらに明らかとなったといえる。

構内全体を俯瞰すると、北大式期の地点は構内南半分を確認される傾向がある。北大式期の地点として、現在、旧留学生センター地点を除く 8 つの地点がある。それらは、K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点(小杉他編 2011a)、K39 遺跡ボプラ並木東地区地点(吉崎・岡田編 1987)、K39 遺跡畜産製造実習室新営工事地点(小杉他編

2011b)、K39 遺跡付属図書館本館再生整備地点(小杉他編 2012)、K39 遺跡農学部実験実習棟地点(小杉他編 2016)、K39 遺跡学術交流会館地点(吉崎・岡田編 1987)、K39 遺跡留学生センター地点(吉崎編 1995)、C44 遺跡植物園収蔵庫地点(小杉他編 2011b)である。サクシユコト二川およびセロンベツ川の中流域から上流域で、北大式期の地点がみられる一方、両河川の下流域(構内の北半分)では発見されていない。

本地点で出土した琥珀片は、特記事項に挙げられる。構内では、K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点(小杉他編 2004)で統縄文文化前半の琥珀製白玉 4 点が出土し、K39 遺跡付属図書館本館再生整備地点第 1 号堅穴住居址(約 8 世紀)、K39 遺跡エルムトンネル地点 6a 層(約 10 世紀前半)では、擦文文化の集落址で琥珀製品が発見された(小杉他編 2012、藤井編 2001)。北大式期の事例はほとんど確認されていなかったが、本発掘調査によって、構内における統縄文文化へ擦文文化の琥珀利用の実態がより明らかとなった。

(守屋)



写真10 旧留学生センター改修地点の出土遺物



A. 調査状況（遠景：南東より）



B. PIT 01（掘出土状態：東より）



C. PIT 01（完掘状況：北より）



D. 窪地（断面：北より）



E. 窪地（完掘状況：北西より）



F. 調査範囲（完掘状況：南東より）

写真11 旧留学生センター改修地点の調査

第III章 試掘・立会調査の成果

III-1 試掘・立会調査で確認された層序

1. 層序

平成 27 (2015) 年度、北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、表 1 に示したように、札幌キャンパス内各地で本発掘調査や試掘調査、立会調査を実施し、多くの土層断面の観察・記録をおこなってきた。その結果、北大

構内における地形発達や堆積物の堆積過程に関して、新たな知見を加えることができた。以下では、試掘調査によって記録された 4 箇所土層を K 39 遺跡ゲスト・ハウス地点の調査成果をもとに設定された「北大構内標準層序」(吉崎編 1995) と対比し、その特徴を記載していく。

図 36-1 は、獣医学部渡り廊下設置工事に伴う試掘調査(1503)で確認された層序である。現況は獣医学部総合研究棟と動物医療センター間で、アスファルト舗装の道路である。TP 02 では客土の下に、黄色褐色粘土質シルト層、砂質シルトと粘土の互層(2層～3層)、暗オリーブ灰色細粒砂層、暗緑灰色粗粒砂層(4層～5層)、黒褐色

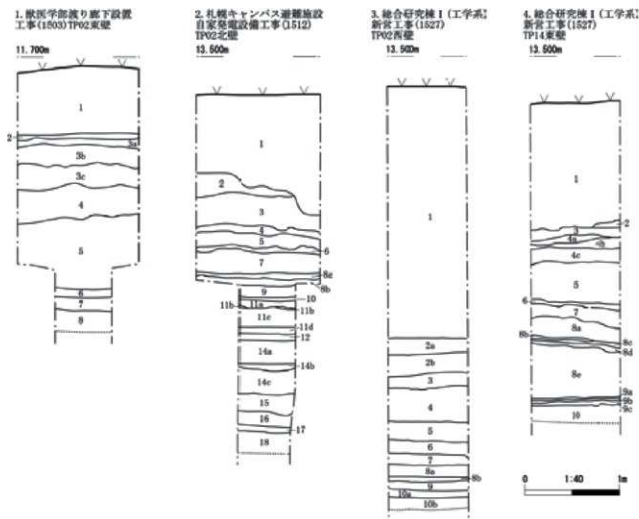


図 36 構内試掘・立会調査セクション図

表 21 北大構内試掘調査層序観察表

調査区名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
醫医学部裏り廊下 設置工事 (1503) TP 02 東 壁	1						客土。
	2	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	やや強	
	3a	10 YR 5/6	黄褐色	砂質シルト	やや弱	中	
	3b	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	中	中	径 0.5 cm の黒色粒子を含む。
	3c	10 YR 4/6	褐色	砂質シルト	中	中	
	4	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	細粒砂	弱	やや強	
	5	7.5 GY 4/1	暗緑灰色	粗粒砂	弱	弱	
	6	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	極強	中	
7	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	やや強	弱		
8	10 YR 3/3	暗褐色	粘土質シルト	弱	強	多量の水、枝を含む。	
札幌キャンパス遊 楽施設自家発電 備工事 (1512) TP 02 北 壁	1						客土。
	2	10 YR 2/2	黒褐色	粘土質シルト	やや弱	やや強	
	3	10 YR 4/6	褐色	砂質シルト	やや弱	中	
	4	10 YR 6/6	明黄褐色	粘土	中	中	
	5	10 YR 6/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	炭化物状粒子を含む。
	6	10 YR 6/3	にぶい黄褐色	粘土	中	中	
	7	10 YR 6/1	褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	8a	10 YR 5/1	褐色	粘土	極強	弱	
	8b	10 YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト	弱	やや弱	
	9	2.5 Y 5/1	黄褐色	粘土	強	弱	
	10	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	弱	酸化した植物片を含む。
	11a	10 YR 4/1	灰色	粘土	強	弱	
	11b	10 YR 4/6	褐色	粗粒砂	弱	弱	
	11c	5 Y 4/1	灰色	粘土	強	弱	植物片(茎)を含む。
	11d	5 Y 3/2	オリーブ黒色	粘土	強	弱	黒色粒子を含む。
	12	5 Y 4/3	暗オリーブ色	粗粒砂	弱	弱	
	14a	7.5 Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	極強	弱	2 つの黒色帯を含む。
	14b	10 YR 4/1	灰色	粘土	極強	弱	
14c	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	極強	弱		
15	5 Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	極強	弱	泥炭状。	
16	7.5 YR 4/1	灰色	粘土	強	弱		
17	5 Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	極強	弱		
18	5 Y 4/1	灰色	粘土	極強	中		
総合研究棟 1 (工 学系) 新設工事 (1527) TP 02 西 壁	1						客土。
	2a	10 YR 2/3	極暗赤褐色	泥炭	中	中	Ta-a 含む。
	2b	7.5 YR 2/3	極暗赤褐色	泥炭	中	中	
	3	2.5 YR 3/2	暗赤褐色	泥炭質粘土	強	やや弱	
	4	2.5 YR 3/4	暗赤褐色	泥炭	中	やや弱	
	5	5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強	
	6	2.5 YR 3/2	暗赤褐色	泥炭質粘土	やや強	中	
	7	2.5 YR 4/2	灰赤色	粘土	強	やや強	
	8a	10 R 3/4	暗赤色	泥炭	中	中	
	8b	7.5 YR 3/4	暗赤色	泥炭	強	中	
9	2.5 YR 4/2	灰赤色	粘土	強	強		
10a	2.5 YR 3/4	暗赤褐色	泥炭	中	中		
10b	10 R 2/3	極暗赤褐色	泥炭	やや弱	やや強		
総合研究棟 1 (工 学系) 新設工事 (1527) TP 14 東 壁	1						客土。
	2	2.5 YR 5/1	黄褐色	粘土	強	強	
	3	2.5 YR 4/1	オリーブ褐色	シルト	強	中	
	4a	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	4b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	強	
	4c	10 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	5	10 YR 6/4	黄褐色	粘土	やや強	やや強	
	6	10 YR 2/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	7	10 YR 6/4	黄褐色	粘土	やや強	やや強	
	8a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	細粒砂	弱	やや弱	
8b	10 YR 3/1	黒褐色	細粒砂	中	やや弱		
8c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	細粒砂	弱	やや弱		
8d	10 YR 3/1	黒褐色	細粒砂	中	やや弱		
8e	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	細粒砂	弱	やや弱		
9a	2.5 YR 4/1	黄灰色	極細粒砂	やや強	やや弱		
9b	10 YR 2/1	黒色	極細粒砂	強	やや弱		
9c	10 YR 4/1	褐色	極細粒砂	強	弱		
10	7.5 YR 5/2	灰褐色	細粒砂	中	弱		

粘土層、灰黄褐色粘土質シルト層、枝木を含む暗褐色粘土質シルト層(6層~8層)が確認できた。標準層序と対比するならば、2層から3層はII層、6層から8層はIII層とIV層に對比でき、4層から5層の砂層は規模の大きな氾濫によってたらされた堆積物と考えられる。図36-2は、札幌キャンパス避難施設自家発電設備工事に伴う試掘調査(1512)で確認された層序である。場所は第一体育館の北東側にあたり、現況は草地である。TP 02 では客土の下に、黒褐色粘土質シルト層(2層)、褐色や黄褐色の砂質シルト層や粘土層(3層~9層)、灰色やオリーブ黒色の粘土層の間に粗粒砂層(10層~18層)が確認できた。標準土層と対比するならば、2層はI層、3層から5層はII層と対応できたが、8層から18層については標準層序との対応を明らかにできなかった。III層からV層のいずれかに対応できると推測する。図36-3と図36-4は、総合研究棟I(工学系)新営工事に伴う試掘調査(1527)で確認された層序である。場所は工学部H棟を取り壊した跡地にあたる。TP 02 では客土の下に、極暗赤褐色泥炭層(2層)、暗赤褐色泥炭と灰赤色粘土の互層(3層~10層)が確認できた。互層の堆積から埋没河道と考えられる。2層の上部にはTa-a火山灰が含まれるため、擦文文化からアイヌ文化期にかけて河道の湿地化と埋没が進行していたと考えられる。同様の堆積層は調査区西側のTP 01, TP 03, TP 04, TP 05, TP 06, TP 08からも確認できた。TP 14では客土の下に、黄褐色粘土層(2層)、オリーブ褐色シルト層(3層)、黒色と黄褐色粘土の互層(4層)、黄褐色と黒褐色粘土の互層(5層~7層)、細粒や極細粒砂層(8層~10層)が確認できた。標準土層と対比するならば、2層から3層はII層、4層はIII層、5層から10層はIV層に對比できると考えられる。調査区東側では縄文文化から統縄文文化、擦文文化にかけての土層が安定して残され、河道はこれらの土層を侵食して形成されたと考えられる。

III-2 2015年度試掘・立会調査の結果

a. 総合研究棟(医学系)改修工事(1501)

302 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.7~1.5 mの深さまで掘削され、玄関前にて地表下約1.3 mから黒褐色土を確認した以外はすべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

b. 工学部屋外ガス管修理工事(1502)

78 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.5~1.7 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

c. 獣医学部入り廊下設置工事(1503)

101 m²の工事予定地内で、平面約2.4 m×1.1 m、地表下約2.7~3.0 mの試掘坑を2箇所設定し、試掘調査を実施した。各試掘坑では、地表下0.7 mまでが客土で、その下から黄色褐色粘土質シルト層、砂質シルトと粘土の互層、暗オリーブ灰色細粒砂層、暗緑灰色粗粒砂層(標準層序II層対応)、黒褐色粘土層、灰黄褐色粘土質シルト層、枝木を含む暗褐色粘土質シルト層(標準層序III層、IV層対応)が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

d. 保育園ポプラ土壌入替工事(1504)

7 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.0~1.1 mの深さまで掘削され、0.5~0.7 mまでが客土で、その下から灰黄色粘土質シルト層、褐色粘土層、暗灰色粘土層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

e. 情報基盤センター北館自家発電設備工事(1505)

30 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下0.6~0.7 mの深さまで掘削され、地表下0.6 mまでが客土で、その下からいぶい黄色シルト層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

f. 局長宿舍屋外ガス設備工事(1506)

13 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下2.0 mの深さまで掘削され、地表下1.5 mまでが客土で、その下から砂質シルト層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

g. アイントープ総合センター外灯設備工事(1507)

17 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.3 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

h. アイントープ総合センター環境整備工事(1508)

155 m²の工事予定地内に関して、立会調査を実施した。地表下約0.8 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

i. 野球場屋外給水管修理工事(1509)

18.6 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。グラウンド東側では地表下約1.4 mの深さまで掘削された。地表下0.4 mまでが客土で、その下からいぶい黄褐色粘土層、明褐色砂層、灰白色粘土層、黒褐色粘土層、灰白色粘土層、浅黄褐色粘土層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。グラウンド北側では地表下約1.2 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

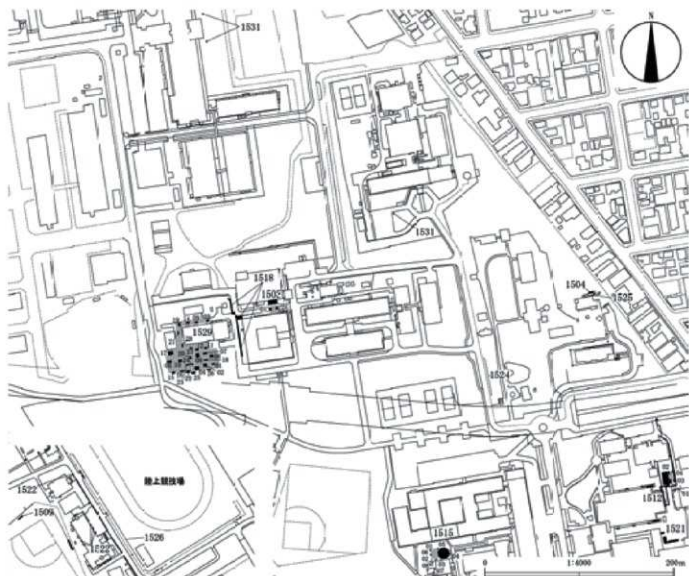


図 37 構内試掘・立会調査位置図(1)

j. 事務局本館屋外排水設備その他工事 (1510)

117 m²の工事予定地内で、平面約1.0 m×2.0 m、深さ約1.4~2.1 mの試掘坑を10箇所設定し、試掘調査を実施した。TP 01, TP 03, TP 05, TP 06, TP 07, TP 10では、地表下約0.5~0.7 mまでが客土で、その下から褐色シルト層、褐色・暗赤褐色極細粒砂層、暗赤褐色細粒~中粒砂層が確認できた。それ以外の試掘坑はすべて客土の範囲内であった。TP 03では、地表下0.5~0.9 mの深さから堅穴住居址と擦文土器を検出した。本工事箇所に関しては、本発掘調査(本報告書第1部第2章2)を行うこととなった。

k. 事務局非常用自家発電設備設置工事 (1511)

196 m²の工事予定地内で、平面約3.0 m×3.0 m、深さ

約1.8 mの試掘坑を1箇所、平面約1.5 m×1.0 m、深さ約1.5 mの試掘坑を4箇所設定し、試掘調査を実施した。TP 01, TP 02, TP 03, TP 04では、地表下約0.8~1.3 mまでが客土で、その下から黒褐色シルト層、ふい黄褐色シルト層、明黄褐色シルト層、中~粗粒砂層、粘土層が確認できた。TP 05は客土の範囲内であった。TP 04では、擦文土器と土坑を検出した。本工事箇所に関しては、本発掘調査(本報告書第1部第2章1)を行うこととなった。

l. 札幌キャンパス避難施設自家発電設備工事 (1512)

240 m²の工事予定地内に関して、試掘調査と立会調査を実施した。試掘調査は、タンク設置予定地に平面約2.4 m×1.1 m、深さ約2.5~3.7 mの試掘坑を4箇所設定し調査を実施した。各試掘坑では、地表下約0.7~0.9 mま

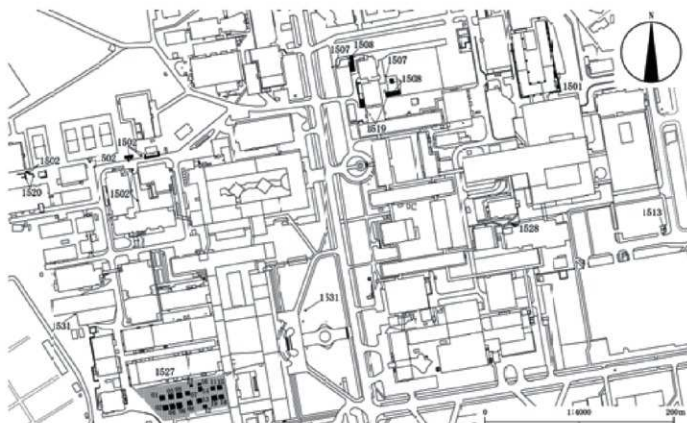


図 38 構内試掘・立会調査位置図(2)

でが客土で、その下から黒色粘土質シルト層（標準層序Ⅰ層対応）、褐色粘土質シルト層、砂質シルト層（標準層序Ⅱ層対応）、褐色粘土層、灰色粘土層、オリーブ黒色粘土層（標準層序Ⅲ層～Ⅴ層対応）が確認できた。立会調査はガス管等設置工事予定地の169㎡で実施した。地表下約0.8～1.5mの深さまで掘削され、発電機設置箇所では、地表下0.9mまでが客土で、その下から黒褐色土、明黄褐色砂層、にぶい黄褐色砂質シルト層が確認できた。ガス管箇所では、地表下0.8mまでが客土で、その下から黒色シルト質粘土層、明青灰色シルト質粘土層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

m. 病院第一外来駐車場土壌入替工事（1513）

1.1㎡の工事予定地に関して、緊急に立会調査を実施した。地表下約0.5mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

n. 旧留学生センター改修工事（1514）

69㎡の工事予定地に関して、試掘調査と立会調査を実施した。試掘調査は、室外機等基礎設置予定地に平面約2.5m×1.0m、深さ約0.9～1.1mの試掘坑を3箇所設定し調査を実施した。各試掘坑では、地表下約0.6～0.8mの深さまでが客土で、その下から明黄褐色シルト

層、にぶい黄褐色砂層が確認できた。TP 02, TP 03 では、鉄鋼土器と溝を検出した。本工事箇所に関しては、本発掘調査（本報告書第1部第2章3）を行うこととなった。立会調査は、排水管設置予定地の13㎡で実施した。地表下約0.9～1.1mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

o. 札幌キャンパス避難施設水槽設置等その他工事（1515）

260㎡の工事予定地内に関して、試掘調査と立会調査を実施した。試掘調査は、水槽設置等予定地に平面約2.0m×1.0m、深さ約1.0～1.9mの試掘坑を8箇所設定し調査を実施した。TP 03, TP 07, TP 08 では、すべて客土の範囲内であった。TP 01, TP 02, TP 04～TP 06 では、地表下約0.7～1.0mまでが客土で、その下から黒色粘土質シルト層（標準層序Ⅰ層対応）、褐色粘土質シルト層、細粒砂層、砂質シルト層、粘土質シルト層（標準層序Ⅱ層対応）が確認できた。立会調査は、既存煙突撤去予定地の149㎡で実施した。地表下約2.0mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

p. 札幌キャンパス災害用備蓄倉庫新営工事（1516）

336㎡の工事予定地内で、平面約2.0m×1.0m、深さ



図 39 構内試掘・立会調査位置図(3)

約 1.6～1.9 m の試掘坑を 9 箇所設定し、試掘調査を実施した。TP 02 はすべて客土の範囲内であったが、その他の試掘坑では、地表下 0.7～1.2 m までが客土で、その下から褐色粘土質シルト層、黄褐色粘土層（標準層序Ⅱ層対応）、灰黄褐色やにぶい黄褐色粘土層（標準層序Ⅲ層対応）、粘土質シルト層（標準層序Ⅳ層対応）が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

q. 管理棟新営工事（1517）

649.5 m² の工事予定地内で、平面約 2.0 m × 2.0 m、深さ約 1.9～2.1 m の試掘坑を 8 箇所設定し、試掘調査を実施した。各試掘坑では、地表下約 1.0 m までが客土で、その下から黒色シルト層、褐色シルト層、暗赤褐色砂層、明褐色砂質シルト層（標準層序Ⅱ層対応）、暗褐色粘土層、にぶい褐色粘土質シルト層、明褐色シルト層、黒褐色粘

土層(標準層序III層対応)、赤褐色シルト質砂層が確認できた。遺構は、TP 04とTP 06でそれぞれ土坑1基、TP 05で竅穴住居址1基を検出し、遺物は、TP 05とTP 07から擦文土器と石器が出土した。本工事予定地に関しては、本発掘調査を2016年度に行うこととなった。

r. 獣医学部入構ゲート設置工事 (1518)

82 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.0 mの深さまで掘削され、地表下0.5~0.7 mまでが客土で、その下から黒色粘土質シルト層、褐色粘土質シルト層、褐色粗粒砂層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

s. アイトープ総合センター新営機械設備工事 (1519)

89 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.9 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

t. 工学部地熱設備工事 (1520)

15 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.8 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

u. 札幌キャンパス遊離施設新営工事 (1521)

992 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.1~1.4 mの深さまで掘削され、地表下約0.9~1.0 mまでが客土で、その下から黒色シルト層、黒褐色シルト層、黄褐色砂質シルト層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

v. 事務局本館樹木移植工事 (1523)

28 m²の工事予定地内に関して、試掘調査と立会調査を実施した。試掘調査は、移植予定地に平面約1.0 m×1.0 m、深さ約1.3 mの試掘坑を2箇所設定し調査を実施した。各試掘坑では、地表下約0.4 mまでが客土で、その下から褐色や暗赤褐色の砂、砂質シルトの層が確認できた。立会調査は、既存樹木撤去予定地の14 m²で実施した。地表下約0.6 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

w. モデルパーンフェンス改修工事 (1524)

3.1 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.6~0.8 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

x. 保育園ポプラ暖房用オイル配管工事 (1525)

2 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.2 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

y. 陸上競技場フェンス改修工事 (1526)

23.6 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.6~0.8 mの深さまで掘削され、すべて客土

の範囲内であった。

z. 総合研究棟 I (工学系) 新営工事 (1527)

2,963 m²の工事予定地内で、平面約4.0 m×4.0 m、深さ約4.0 mの試掘坑を14箇所、平面約1.0 m×2.0 m、深さ約2.0 mの試掘坑を3箇所設定し、試掘調査を実施した。TP 01~TP 06, TP 08では、地表下約2.0~2.5 mまでが客土で、その下から主に赤褐色の泥炭と粘土の互層が確認できた。堆積状況から埋没河道と考えられる。TP 07, TP 11~TP 15, TP 17, TP 18では、地表下約1.0~1.6 mまでが客土で、その下から暗赤褐色極細粒砂層、褐色・灰褐色の粘土と黒色・黒褐色の粘土の互層、にぶい褐色の細粒砂層が確認できた。TP 19はすべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。

aa. 大学病院管理棟屋外排水設備工事 (1528)

6 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約0.9~1.4 mの深さまで掘削され、すべて客土の範囲内であった。

ab. 獣医学研究科大動物実験研究施設新営工事 (1529)

1,801 m²の工事予定地内で、平面約2.4 m×2.0 m、深さ約1.5~3.0 mの試掘坑を27箇所設定し、試掘調査を実施した。TP 21はすべて客土の範囲内であったが、その他の各試掘坑では、地表下約1.0 mまでが客土で、その下から粘土質シルト層、砂質シルト層もしくは細粒砂層(標準層序II層対応)、灰色粘土層、黒色粘土質シルト層、灰色粘土層(標準層序III層~V層対応)が確認できた。TP 10, TP 14~16, TP 19~25, TP 27, TP 28では、谷状の落ち込みを確認したため埋没河道と考えた。遺構はTP 25から柱穴址1基を検出し、遺物はTP 17の粘土質シルト層から擦文土器42点が出土した。本工事予定地に関しては、本発掘調査を2016年度に行うこととなった。

ac. 農学部北側園外線工事 (1530)

5 m²の工事予定地に関して、立会調査を実施した。地表下約1.6~2.0 mの深さまで掘削され、地表下約0.2 mまでが客土で、その下から褐色粘土質シルト層、砂礫層、粘土質シルト層、砂と粘土の互層、砂礫層、灰白色粘土層、青灰色粘土層が確認できた。遺物・遺構は検出されなかった。

ad. 札幌キャンパス太陽光外灯設置工事 (1531)

6 m²の工事予定地の内4.8 m²に関して、立会調査を実施した。創成科学研究棟東側では、地表下約1.1 mの深さまで掘削され、地表下約0.8 mまでが客土で、その下から黄褐色砂層が確認できた。それ以外の工事箇所では、すべて客土の範囲内であった。遺物・遺構は検出されなかった。(本山)



A. 獣医学部渡り廊下設置工事調査箇所 (北西から)
1503



B. 獣医学部渡り廊下設置工事 TP 02 東壁 1503



C. 札幌キャンパス避難施設自家発電設備工事
TP 02 北壁 1512



D. 札幌キャンパス避難施設水槽設置その他工事
TP 06 西壁 1515



E. 総合研究棟 I (工学系) 新営工事調査箇所 (南
西から) 1527



G. 総合研究棟 I (工学系) 新営工事 TP 14 東壁
1527



F. 総合研究棟 I (工学系) 新営工事 TP 02 西壁
1527

写真 12 2015 年度調査の状況

第 2 部 平成 27 年度年次事業報告

2-1 調査活動

1. 緊急調査一本発掘・試掘・立会調査及び慎重工事

平成27年度に札幌キャンパス内では、本発掘調査3件、試掘調査11件、立会調査23件、慎重工事4件が行われた。本発掘調査に関しては本報告書II章、試掘・立会調査に関してはIII章に詳しくまとめられている。

2. 計画調査—基盤情報整備

平成27年4月から5年間の5年間を第一次計画調査期間として、その第1年目にあたる平成27年度は、次年度より実際に行う計画的な発掘調査のための基盤情報の整備に着手した。基盤情報の整備では、昭和55年度～平成26年度までの調査活動によって得られた各種データ（遺構・遺物の種類・位置情報、地層の堆積状態、埋没河道の位置・広がり、既調査深度など）をキャンパス地図（図40）に関連付けて、データ類の一元化検索システムの構築を進めている。埋没河道の位置と遺跡の分布密度とを考慮して、キャンパス内をAゾーン、Bゾーンに区分した中間的な成果を踏まえて、次年度以降の計画調査の実施場所の選定を進めている。

2-2 教育普及活動

1. 北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室

a. 常設展示

2015年4月から展示室を常時一般開放した。開館時間は午前9時から午後4時30分まで、休館日は毎週土曜・日曜日、年末年始(12月29日～1月3日)、祝日である。入館料は無料となっている。

表22 常設展示資料一覧表

展示場所	展示内容	展示物
ケース1	縄文文化総論・総論文化	土器11点、石器33点、パネル1点
ケース2	総論文化	土器7点、石器84点、パネル1点
ケース3	総論文化	土器15点、石器66点、パネル2点
ケース4	総論文化	室内炉地(阿努登り)
ケース5	縄文文化	土器31点、石器16点、土製品1点、パネル1点
ケース6	縄文文化	土器10点、石器26点、土製品9点、石製品10点、鉄製品2点、骨製品1点、木製品6点、自然遺物11点、パネル8点
ケース7	縄文文化	土器29点、鉄製品1点、パネル7点
ケース8	アイヌ文化—近現代	木製品4点、陶磁器13点、ガラス製品15点、パネル2点
ケース9	企画展示	※下記要覧



写真13 展示室の様子

2. 企画展示

a. 第1回企画展示「埋文センターに至る30年の歩み」

開催期間：平成27年7月27日～平成27年9月25日
(土日祝日を除く42日間)

入場者数：359人

1980年に設立された北海道大学埋蔵文化財調査室は、2015年4月から学内共同施設(特定業務施設)となり、名称も北海道大学埋蔵文化財調査センターと改めた。その新たなスタートを記念して、これまで北大キャンパスで行われた60件余りおよび調査を、当時の調査風景写真パネルや出土遺物を展示した。

展示物：土器19点(中央道路応用電気研究所前地点9点、ポプラ並木東地点1点、恵迪寮地点4点、附属図書館再生整備地点3点、工学部共用実験棟地点1点、学生部体育館地点1点)、石器14点(ポプラ並木東地点1点、工学部共用実験棟地点13点)、恵迪寮地点出土土製品2点、ポプラ並木東地点出土ガラス玉3点、ポプラ並木東地点出土土玉1点、恵迪寮地点出土木製品2点、恵迪寮地点出土骨製品1点、恵迪寮地点出土自然遺物5点、パネル19枚

b. 第2回企画展示「道内出土の受け口付き土器」

開催期間：平成27年10月5日～平成27年12月11日
(土日祝日を除く47日間)

入場者数：477人

K39遺跡農学部実験実習棟地点や恵迪寮地点等出土した「受け口付き土器」を、恵庭市や千歳市、札幌市の出土資料とともに紹介し、その使用方法などを説明した。資料の借用には恵庭市教育委員会、札幌市教育委員会、千歳市教育委員会、(公財)北海道埋蔵文化財調査センターのご協力をいただいた。

展示物：土器4点(恵迪寮地点1点、農学部実験実習棟地点2点、薬学部校舎改修工事予定地1点)、農学部実験

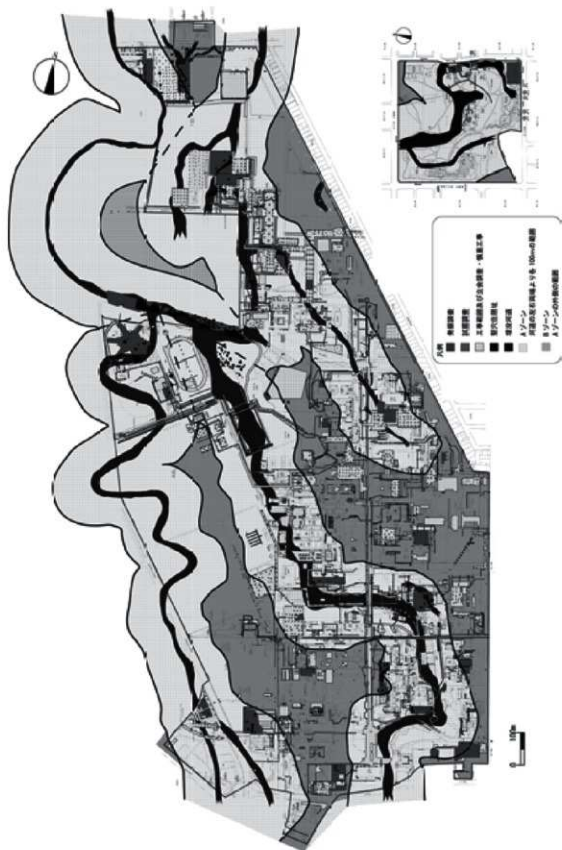


図 40 北大札幌キャンパス内のゾーン区分

実習棟地点出土自然遺物 2点、パネル 16点、借用資料 4点（恵庭市教育委員会所蔵土器 1点、札幌市教育委員会所蔵土器 1点、千歳市教育委員会所蔵土器 1点、(公財)北海道埋蔵文化財センター所蔵土器 1点)

c. 第3回企画展示「平成27年度北海道大学埋蔵文化財調査センター調査成果速報展」

開催期間：平成28年2月8日～平成28年3月31日
(土日祝日を除く42日間)

入場者数：151人

平成27年度に行った本発掘調査や試掘調査で得られた遺物等を紹介した。事務局非常用自家発電設備設置地点からは紡錘車を展示し、イラストを用いて使用方法をわかりやすく解説するなどした。

展示物：土器 25点(事務局非常用自家発電設備設置地点 7点、事務局本館屋外排水設備地点 9点、平成27年度旧留学生センター地点 1点、平成5年度旧留学生センター地点 2点、獣医学研究科大動物実験施設地点 2点、管理棟地点 1点、ポプラ並木東地点 1点、農学部実験実習棟地点 1点、薬学部校舎改修工事予定地 1点)、石器 13点(事務局非常用自家発電設備設置地点 3点、平成27年度旧留学生センター地点 6点、平成5年度旧留学生センター地点 1点、管理棟地点 3点)、事務局非常用自家発電設備設置地点出土土製品 1点、平成27年度旧留学生センター地点出土石製品 5点、陶磁器 5点(中講堂地点 4点、事務局本館屋外排水設備地点 1点)、中講堂地点出土ガラス製品 4点、パネル 15点

3. 北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター

平成19年から発行している刊物で、内容は北海道大学キャンパス内での発掘調査等を通じて得られた知見をもとにした特集記事や、主催行事の案内を掲載している。平成27年度から「北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター」と名称を変更し、本年度は3つを発行した。第21号は、「埋蔵文化財調査センターの開設にあたって」(平成27年7月発行)と題し、調査センターの活動内容を紹介した。第22号では、「特集 受け口付き土器」(平成27年9月発行)と題し、北大キャンパス内の遺跡から出土した資料を周辺遺跡の類似資料とともに紹介した。第23号では、「特集 河川の考古学」(平成28年3月発行)と題し、発掘調査で発見される埋没河道について紹介した。

4. 遺跡トレイルウォーク

平成21年から北海道大学キャンパス内にある遺跡の

周知を目的として、毎年2回、キャンパス内に設置したサテライトサインをテーマに基づいて訪ねるトレイルウォークを開催している。平成27年度は第13回を7月、第14回を10月に行った。第13回は「北大式土器を訪ねて」と題し、北大キャンパス内にある縄文文化の遺跡を巡った。参加人数は65名であった。第14回は「メモ周辺の遺跡をめぐる」と題し、北大キャンパス内を流れるサクシュコトニ川とセロンベツ川の水源地であったメモと、発掘調査中の事務局非常用自家発電設備設置地点を見学した。参加人数は83名であった。



写真14 第13回トレイルウォークの様子

5. 調査成果報告会

北海道大学キャンパス内で各年度に行われた発掘調査の成果を紹介し、合わせて考古学に関わる様々な分野の専門家による特別講演を実施している。また、報告会の内容をまとめた要旨集を作成し配布している。平成19年度から数えて第8回目となった本年度は平成28年2月20日(土)に以下の内容で開催し、参加人数は75名であった。



写真15 第8回調査成果報告会の様子

第1部 (調査成果報告)

- ・「埋蔵文化財調査センターによる2015年度調査の概要」

報告者 本山志郎
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)

- ・「K39 遺跡事務局非常用自家発電設備設置地点の調査成果」

報告者 坂口 隆
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)

- ・「K39 遺跡事務局本館屋外排水設備地点の調査成果」

報告者 高倉 純
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)

- ・「K39 遺跡旧留学生センター地点の調査成果」

報告者 守屋豊人
(北海道大学埋蔵文化財調査センター)

第2部 (特別講演)

- ・「擦文化のカマド・支脚・甕」

講演者 柏木大延
(札幌市埋蔵文化財センター)

6. 資料利用

a. 資料掲載

- ・旭川市博物館 瀬川拓郎
『朝日新聞北海道版「北の文化」 朝日新聞朝刊
資料：K39 遺跡恵迪察地点調査風景写真
日時：平成27年6月12日(金)』

b. 資料観察

- ・岩手大学教育学部 佐藤由紀男
続縄文時代の磨製石斧の研究、及び擦文土器の使用痕研究のため。

資料：K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点出土磨製石斧1点、K39 遺跡恵迪察地点出土擦文土器74点、計75点

日時：平成27年9月3日(木)

c. 資料貸出

- ・北海道大学大学院農学研究院 佐野雄三
「さっぽろサイエンスフェスティバル2015 in 北大」
「森林を研究してみよう！～樹木とキノコの魅力～」展示ブース

資料：K39 遺跡恵迪察地点出土木製品2点
期間：平成27年12月18日～12月21日

d. 資料説明

- ・放送大学学友会
「北海道大学構内の遺跡について」

場所：遺跡保存庭園

日時：平成27年5月19日(火)

- ・さっぽろ縄文探検隊

「北大構内の擦文遺跡について」

場所：北大構内

日時：平成27年10月25日(日)

7. その他刊行物

- ・北大埋蔵文化財調査センターパンフレット(5000部)

2-3 統計・資料

1. 入館データ

a. 見学団体

- ・札幌アイヌ協会「北海道大学アイヌ民族と歩く北大周辺歴史遺跡を巡るツアー」20名

日時：5月24日(日)

- ・北海道大学総合博物館「一般教育演習北大エコキャンパスの自然と歴史」25名

日時：5月29日(金)

- ・札幌アイヌ協会「札幌市アイヌ文化体験講座」20名

日時：6月14日(日)

- ・NPO法人ねおす「ここいく放課後自然体験活動」13名

日時：6月16日(火)

- ・放送大学学友会「北大キャンパス散策」10名

日時：10月27日(火)

b. 月別開館日数及び入館者数

表23 月別開館日数及び入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	21	18	22	22	21	19	21	19	19	20	22	14	4日
入館者数	3	62	70	100	267	178	295	177	35	19	31	34	915人

2. 組織・構成

a. 埋蔵文化財運営委員会

- 委員長 小杉 康 (文学研究科 教授)
- 委員 三上 隆 (副学長)
- 高瀬 克範 (文学研究科 准教授)
- 増田 隆一 (理学研究院 教授)
- 石川 達也 (工学研究院 教授)
- 佐野 雄三 (農学研究院 教授)
- 山本 正伸 (地球環境科学研究院 准教授)
- 高橋 英樹 (総合博物館 教授)

b. 調査専門部会

部会長 小杉 康 (文学研究科 教授)
 部会員 高瀬 克範 (文学研究科 准教授)
 増田 隆一 (理学研究院 教授)
 石川 達也 (工学研究院 教授)
 佐野 雄三 (農学研究院 教授)
 山本 正伸 (地球環境科学研究所 准教授)
 高橋 英樹 (総合博物館 教授)

c. 北海道大学埋蔵文化財調査センタースタッフ

センター長 小杉 康 (文学研究科 教授)
 センター員 高倉 純 (助教)
 守屋 豊人 (助教)
 坂口 隆 (特定専門職員)
 本山 志郎 (特定専門職員)
 山田 由美子 (技能補助員)
 百々 千鶴 (技能補助員)

3. 受領刊行物一覧

表 24 受領刊行物一覧表(1)

[函内]	
1.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査年報 28 平成 27 年度』
2.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 329 集 木古内町新道 4 遺跡(4)』
3.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 329 集 木古内町新道 4 遺跡(2) 第 1 分冊・第 2 分冊』
4.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 322 集 厚真町シヨロマ 2 遺跡』
5.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 323 集 千歳市キウス 3 遺跡・キウス 11 遺跡』
6.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 324 集 根室市トーマズボロ調査区(2)』
7.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 325 集 厚真町イカブシユナタセ 3 遺跡』
8.	(公財)北海道埋蔵文化財センター『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第 326 集 厚真町富里 3 遺跡』
9.	公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『木と生きる』
10.	札幌市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書 7 平成 26 年度調査報告書』
11.	札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告書 103 C 051 遺跡』
12.	札幌市教育委員会『石井縄文遺跡調査報告書 1 H 008 遺跡』
13.	恵庭市教育委員会『北海道恵庭市発掘調査報告書 恵庭市内遺跡発掘調査等報告書 1』
14.	恵庭市教育委員会『北海道恵庭市発掘調査報告書 柏木川 1 遺跡 II』
15.	恵庭市教育委員会『北海道恵庭市発掘調査報告書 島松 B チャンネル・島松於 8 遺跡』
16.	厚真町教育委員会『厚真町年報 1 遺跡』
17.	厚真町教育委員会『厚真町土木建設課に伴う埋蔵文化財調査報告書 12 厚真町シヨロマ 1 遺跡 II』
18.	厚真町教育委員会『厚真町土木建設課に伴う埋蔵文化財調査報告書 13 厚真町シヨロマ 2 遺跡』
19.	江別市郷土資料館『江別市郷土資料館年報 Vol.12』
20.	網走町立博物館『網走町立博物館紀要第 13 号』
21.	釧路市教育委員会『釧路市内内遺跡発掘調査等事業報告書(1)』
22.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書 I 名寄市智恵、天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
23.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書 II 名寄市智恵、天塩川掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
24.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅲ 名寄市の遺跡』
25.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅳ 日進 2 遺跡・日進 31 遺跡』
26.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅴ 日進 33 遺跡』
27.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅵ 北進 4 遺跡』
28.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅶ 日進 23 遺跡』
29.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅷ 日進 19 遺跡』
30.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅷ 日進 22 遺跡・日進 27 遺跡』
31.	名寄市教育委員会『名寄市文化財調査報告書Ⅸ 智北 6 遺跡』
32.	標茶町教育委員会『元村遺跡発掘調査報告書』
33.	標茶町郷土館『標茶町郷土館報告書 27 号』
34.	わかむ町教育委員会『市内遺跡所在調査発掘調査報告書(ニサナイ 1 遺跡)』
35.	中川町エコミュージアムセンター『安平志内川右岸遺跡』
36.	利尻町立博物館『利尻研究(利尻町立博物館年報)第 35 号』
[函外]	
37.	弘前大学人文学部北日本考古学センター『冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書 4』
38.	弘前大学人文学部北日本考古学センター『冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書 5』
39.	南砺町教育委員会『南砺市関通船場跡 8 因幡寺聖母寺館跡発掘調査報告書』
40.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『年報平成 26 年度版』
41.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要第 34 号』
42.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 631 集 無量光院跡 26 次・花立 1 遺跡 30 次・花立 2 遺跡 24 次発掘調査報告書』
43.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 632 集 石田 1・日進発掘調査報告書 第 1 分冊・第 2 分冊』
44.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 633 集 津町 1 遺跡発掘調査報告書 第 1 分冊・第 2 分冊』
45.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 634 集 小野遺跡・町裏 1 遺跡・町裏 2 遺跡発掘調査報告書』
46.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 635 集 野鴨 1 遺跡発掘調査報告書』
47.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 636 集 中野遺跡発掘調査報告書』
48.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 637 集 奉津遺跡発掘調査報告書』
49.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 638 集 花畑遺跡発掘調査報告書』
50.	(公財)若子原文化振興事業団埋蔵文化財センター『若子原文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 639 集 田の口遺跡発掘調査報告書』

表25 受領刊行物一覧表(2)

51.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第640集 関本戸口遺跡・関本戸V遺跡発掘調査報告書」
52.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第641集 津波石森大遺跡発掘調査報告書」
53.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第642集 豊田新田1遺跡発掘調査報告書」
54.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第643集 川口川遺跡・川口川遺跡発掘調査報告書」
55.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第644集 小成川遺跡発掘調査報告書」
56.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第645集 島越川遺跡・島越川IV遺跡・菅沼跡発掘調査報告書」
57.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第646集 外屋原Ⅲ遺跡発掘調査報告書」
58.	(公財) 若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財センター 「若手歴史文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集 平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋II遺跡」
59.	盛岡市遺跡の学び館 「平成25年度鑑賞」
60.	盛岡市遺跡の学び館 「第33回埋蔵文化財調査資料集」
61.	東北大学埋蔵文化財調査室 「年次報告2013」
62.	東北大学埋蔵文化財調査室 「東北大学埋蔵文化財調査室調査報告4 芦ノ口遺跡第9次調査 青葉山I遺跡第9次調査」
63.	栃木県教育委員会 「栃木県埋蔵文化財調査報告書第371集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報37」
64.	栃木県教育委員会 「栃木県埋蔵文化財調査報告書第372集 栃木県重要遺跡発見確認調査報告書」
65.	栃木県教育委員会 「栃木県埋蔵文化財調査報告書第373集 市ノ原遺跡」
66.	栃木県教育委員会 「栃木県埋蔵文化財調査報告書第374集 金谷宮跡」
67.	栃木県教育委員会 「栃木県埋蔵文化財調査報告書第375集 野高谷築山遺跡」
68.	(公財) ちぎ未来づくり財団 「埋蔵文化財センター年報第24号(平成26年度版)」
69.	(公財) ちぎ未来づくり財団 「研究紀要第23号」
70.	公益財団法人千葉県教育振興財団 「千葉県教育振興財団埋蔵文化財センター年報No.40-平成26年度-」
71.	公益財団法人千葉県教育振興財団 「研究連絡誌第7号」
72.	葛飾区教育委員会 「平成26年度葛飾区埋蔵文化財調査年報」
73.	駒澤大学考古学研究室 「駒澤考古第40号」
74.	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科 「山梨県北杜市明野町上神歌 諏訪原遺跡発掘調査概要2015年度」
75.	明治大学文学部・社会連携部博物館事務室 「明治大学博物館年報2014年度」
76.	明治大学校地内遺跡調査団 「明治大学校地内遺跡調査団調査研究報告書7 下野・富士見町遺跡Ⅱ後期Ⅱ石室時代の発掘調査」
77.	明治大学博物館 「明治大学博物館研究報告第20号」
78.	石川県小松市教育委員会 「第3部製玉編・第4部本編編 八日市地方遺跡Ⅱ」
79.	石川県小松市教育委員会 「小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
80.	金沢大学文学部考古学研究室 「金沢大学考古学紀要第36号(40周年記念号)」
81.	静岡埋蔵文化財センター 「研究紀要第4号」
82.	三重埋蔵文化財センター 「研究紀要第24号」
83.	三重埋蔵文化財センター 「平成26年度三重埋蔵文化財年報」
84.	京都大学文化財総合研究センター 「京都大学構内遺跡調査研究年報2013年度」
85.	同志社大学歴史資料館 「同志社大学歴史資料館第18号」
86.	大手前大学史学研究所 「大手前大学史学研究所紀要第18号」
87.	大手前大学史学研究所 「大手前大学史学研究所研究報告第14号 播磨六磨寺の研究Ⅱ」
88.	大手前大学史学研究所 「大手前大学史学研究所研究報告第16号 京都府宇治市炭山遺跡」
89.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所年報41平成26年度(2014)」
90.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県立橿原考古学研究所紀要考古学論叢第39冊」
91.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県遺跡調査概報2014年度(第二分冊)」
92.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県遺跡調査概報2015年度(第一分冊)」
93.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県文化財調査報告書第167集 御川遺跡」
94.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県文化財調査報告書第168集 四木遺跡Ⅱ」
95.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県文化財調査報告書第169集 今出遺跡Ⅰ」
96.	奈良県立橿原考古学研究所 「奈良県文化財調査報告書第170集 稲葉車藏遺跡」
97.	奈良県立橿原考古学研究所 「古墳時代における継承系集団の出自と役割に関する考古学的研究」
98.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第144号」
99.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第145号」
100.	奈良県立橿原考古学研究所 「青陵第146号」
101.	奈良大学文学部文化財学系 「文化財学報第33集」
102.	公益財団法人由良大和古代文化研究協会 「研究紀要第19集」
103.	島根県大田市教育委員会 「長門山谷地区・宗家住宅・町並み保存地区 石見銀山Iwami-Ginzan Silver Mine Site」
104.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2014」
105.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 「岡山大学埋蔵文化財調査報告書第31冊 御田遺跡Ⅱ」
106.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 「古墳の発生時代」
107.	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報No.55」
108.	山口大学埋蔵文化財資料館 「山口大学埋蔵文化財資料館年報9 山口大学埋蔵文化財資料館年報」
109.	北九州市教育委員会 「北九州市文化財調査報告書第138集 成瀬寺跡」
110.	北九州市教育委員会 「北九州市文化財調査報告書第139集 黒崎城跡」
111.	北九州市教育委員会 「北九州市文化財調査報告書第140集 轟山遺跡H地点」
112.	北九州市教育委員会 「北九州市文化財調査報告書第141集 轟山遺跡第3地点」
113.	熊本大学埋蔵文化財調査室 「熊本大学埋蔵文化財調査報告書第2集 熊本大学構内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
114.	熊本大学埋蔵文化財調査室 「熊本大学埋蔵文化財調査報告書第7集 熊本大学構内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」
115.	熊本大学埋蔵文化財調査センター 「熊本大学埋蔵文化財調査センター年報50」
116.	鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム 「鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告第13集」

参考・引用文献

- 阿部常樹 2012
「附属図書館本館再生整備地点駆住居址 (HP 01) 出土の動物遺体」『北大構内の遺跡Ⅻ』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 小泉 格・林 譯作編 2000
『北大構内の遺跡 平成7・8・9・10年度 11』北海道大学。
- 小杉 康編 2002
『北大構内の遺跡Ⅲ』北海道大学。
- 小杉 康編 2003
『北大構内の遺跡Ⅳ』北海道大学。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2004
『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ (遺物・遺構編)』北海道大学。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2005
『K 39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ (自然科学分析および出土遺物・遺構考察編)』北海道大学。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2011a
『K 39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・荒山千恵編 2011b
『北大構内の遺跡Ⅷ』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2012
『北大構内の遺跡Ⅸ』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆編 2013
『北大構内の遺跡Ⅺ』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎編 2016
『北大構内の遺跡ⅩⅢ』北海道大学埋蔵文化財調査センター。
- 鯉嶋山積・五十嵐八枝子・近藤 務・鎌田耕太郎・吉田充夫・地徳力・外崎徳二・工藤千春・岡村 聡・加藤 誠 2007
『札幌市街域における 150 m 掘削コアの第四系層序』『地質学雑誌』113 巻 391-405 頁。
- 佐々木出香・バンドリスダグシヤン 2012
『植物遺体同定』『北大構内の遺跡Ⅹ』北海道大学埋蔵文化財調査室。
- 佐々木出香・バンドリスダグシヤン 2016a
『炭化種実』『北大構内の遺跡ⅩⅣ』北海道大学埋蔵文化財調査センター。
- 佐々木出香・バンドリスダグシヤン 2016b
『農学部実験実習棟地点出土の炭化種実の分析』『北大構内の遺跡ⅩⅤ』北海道大学埋蔵文化財調査センター。
- 札幌市埋蔵文化財センター編 1993
『K 435 遺跡第 1 次調査』札幌市教育委員会
大丸裕武 1989
『完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原の形成過程』『地理学評論』62 巻 589-603 頁。
- 田村俊之編 1994
『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会。
- 中田裕香・上野秀一・平川善祥・越田賢一郎・石川直章・藤井誠二・石井 淳 1999
『擦文土器集成』『海峡と北の考古学シンポジウム・テーマ 2-3 資料集Ⅱ』日本考古学協会 1999 年度銅路大会実行委員会。287-322 頁。
- 藤井誠二編 2001
『K 39 遺跡第 6 次調査』札幌市教育委員会。
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1987
『北大構内の遺跡 昭和 59 年度 [5]』北海道大学。
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1988
『北大構内の遺跡 昭和 60-61 年度 [6]』北海道大学。
- 吉崎昌一・橋本基代 2001
『札幌市 K 39 遺跡第 6 次調査で出土した炭化種子』『K 39 遺跡第 6 次調査 (第 5 分冊)』札幌市教育委員会。
- 吉崎昌一編 1986
『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学。
- 吉崎昌一編 1989
『北大構内の遺跡 昭和 62-63 年度 [7]』北海道大学。
- 吉崎昌一編 1995
『北大構内の遺跡 平成 3・4・5・6 年度 10』北海道大学。
- Crawford, G. W. 1986
『サクシュコトニ川遺跡出土の植物遺存体』『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学。

報告書抄録

ふりがな	ほくだいこうないのいせき にじゅうさん							
書名	北大構内の遺跡 XXII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	北大構内の遺跡							
シリーズ号	XXII							
編著者名	小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎・伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也・高瀬克範							
編集機関	北海道大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 TEL.011-706-2671 FAX.011-706-2094							
発行年月日	2017年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
K39遺跡	札幌市北区	1101	39					
事務局非常用自家発電設備				43度4分18 秒	141度20分 48秒	20150901～ 20151013	196	非常用自家発電設備設置工事
K 3 9遺跡	札幌市北区	1101	39					
事務局本館屋外排水設備				43度4分16 秒	141度20分 43秒	20150824～ 20150904	14	排水管設置工事
K 3 9遺跡	札幌市北区	1101	39					
旧留学生センター改修				43度4分11 秒	141度20分 26秒	20150924～ 20151009	31	建物改修工事
ふりがな 所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
事務局非常用自家発電設備	集落址	擦文		竪穴住居址1基, 土坑1基, 小ピット5基		土器, 石器, 礫		
事務局本館屋外排水設備	集落址	擦文		竪穴住居址1基, 土坑1基		土器, 石器, 礫		
旧留学生センター改修	墓域	縄縄文		土坑1基		土器, 礫		

北大構内の遺跡 XXIII

平成 29 (2017) 年 3 月 31 日発行

発行 北海道大学埋蔵文化財調査センター
札幌市北区北 11 条西 7 丁目

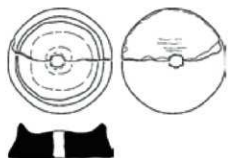
編集 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・
坂口 隆・本山志郎

印刷 朝アイワード
060-0033 札幌市中央区北 3 条東 5 丁目
011-241-9341

HOKKAIDO UNIVERSITY

CAMPUS SITES

XXIII



Archaeological Research Center,
Hokkaido University
March, 2017